

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
<b>オペラ</b>			
ミラノ・スカラ座2016『二人のフォスカリ』	2、2、11、11、14、14、17、17	<p>実在のヴェネツィア共和国総督フランチェスコ・フォスカリが、政敵の罠によって無実の罪で投獄された息子ヤコボへの愛と、総督としての立場の狭間で苦悩します。ヤコボの妻ルクレツィアの懇願も虚しく、ヤコボは流刑地へ赴く途中で亡くなり、老フォスカリは地位を奪われて憤死します。近年とみに人気と評価が高まっているヴェルディ初期作品。</p>	<p>2016年1月に75歳を迎えた“三大テノール”ブラシド・ドミンゴが、イタリア・オペラの殿堂で、“ヴェルディ・バリトンの最高峰”の一つで悲哀に満ち葛藤する主人公フランチェスコ・フォスカリを演じることに話題沸騰。ヤコボを演じるフランチェスコ・メーリはミラノ・スカラ座2015-16年シーズン開幕公演『ジョヴァンナ・ダルコ』で名演を披露したばかりの30代テノール。ルクレツィアには、2013年ザルツブルク音楽祭『ナブッコ』でタチアナ・セルジャンの代役としてリカルド・ムーティに抜擢され、新星の如く登場したドラマティック・ソプラノの新星、アンナ・ピロツィ。彼女はこの公演がスカラ座主役デビューとなりました。</p> <p>“イタリアの未来”と期待される若きボローニャ歌劇場芸術監督ミケーレ・マリオッティが、“イタリアの魂”ヴェルディの初期オペラを、“イタリア・オペラの殿堂”ミラノ・スカラ座で指揮した公演。演出はザルツブルク音楽祭『兵士たち』の衝撃的な演出が絶賛された1965年ラトヴィア生まれのアルヴィス・ヘルマニス。この公演で彼は装置も担当し、衣裳やビデオ映像もラトヴィア人アーティストで固めました。</p> <p>[ストーリー]ヴェネツィア総督フランチェスコ・フォスカリは無実の罪を被った息子ヤコボを裁かなければならない。息子の妻ルクレツィアの嘆願も空しく、彼らを恨む政敵ロレダーノの策略でヤコボは死に、父は苦悩の中で息絶える。</p> <p>[出演]ブラシド・ドミンゴ（フランチェスコ・フォスカリ／バリトン）フランチェスコ・メーリ（ヤコボ・フォスカリ／テノール）アンナ・ピロツィ（ルクレツィア／ソプラノ）アンドレア・コンチエッティ（ヤコボ・ロレダーノ／バス）エドアルド・ミッレツィ（リカルド・ゴッティ／テノール）キアラ・ボリドーリ（ビザナ／ソプラノ）アゼル・レザ＝ザデ（十人委員会の委員／テノール）ティル・フォン・オルロフスキー（総督の従僕／バス）</p> <p>[演目]ジュゼッペ・ヴェルディ：3幕のトラジエディア・リリカ『二人のフォスカリ』[台本]フランチェスコ・マリア・ピアヴェ[原作]バイロンの戯曲『二人のフォスカリ』</p> <p>[演出 &amp; 装置]アルヴィス・ヘルマニス[衣裳]クリスティーン・ユリアーネ[照明]グレア・フィルシュティンスキー[振付]アラ・シカロヴァ[映像]イネタ・シブノヴァ[ドラマトゥルギー]オリヴィエ・レクサ[指揮]ミケーレ・マリオッティ[演奏]ミラノ・スカラ座管弦楽団及び同合唱団[収録]2016年2月25日ミラノ・スカラ座</p> <p>■字幕／全3幕：約2時間11分</p>
パイロイト音楽祭1983『トリスタンとイゾルデ』	3、3、8、8、13、13、19、19	<p>パイロイト音楽祭における『トリスタンとイゾルデ』上演史上、今なお語り継がれる名プロダクション。第3幕全てがトリスタンの幻覚であったという衝撃のラストが賛否両論を巻き起こした、フランスの鬼才ジャン＝ピエール・ポネルによる伝説の演出です。</p>	<p>ワーグナー自身の台本によって主人公2人の内面の世界が描かれる『トリスタンとイゾルデ』は、半音階和声（古典的機能と和声の崩壊につながった「トリスタン和声」）や無限旋律（一つの旋律が終わらないうちに新しい旋律が一つの線で繋がる）など、まさに20世紀現代音楽の扉を開いた画期的作品として知られています。クラシック音楽は「トリスタン以前」「トリスタン以後」と呼ばれるくらい、この作品の影響力はあまりにも絶大でした。</p> <p>この番組は、ワーグナー没後100年の1983年10月、このプロダクションの初演（1981年）メンバーによるパフォーマンスをパイロイト祝祭劇場で撮影したもの。およそ4時間にわたって持続するライブパフォーマンスのような緊張感と、当時40歳のダニエル・バレンボイムの抒情的で崇高、繊細な音楽作り到最后まで画面から目が離せません。なお、ポネルは映像化にあたり、演出の意図をより理解してもらうために、ラストを映像的表現に変えています。</p> <p>トリスタンは、20世紀を代表するワーグナー歌手、ルネ・コロ（当時45歳）。イゾルデはイゾルデ歌いとして知られたソプラノ、ヨハンナ・マイアー。彼らが歌う第2幕「愛の二重唱」の比類のない美しさ、そしてラストの名唱は感動的です。</p> <p>そして何よりも、その視覚的な舞台映像の美しさと、ワーグナーの官能的な音楽に寄り添ったリアルな展開が見え、ポネルの天才的な演出がよくわかる番組です。</p> <p>[ストーリー]</p> <p>騎士トリスタンは、叔父マルケ王の妃となるアイルランド王女イゾルデを迎えに行く。彼女は自分の婚約者を殺したトリスタンに復讐しようと毒薬を飲ませ、自らも杯をあおるが、侍女ブランゲーネが用意したのは愛の媚薬であった。恋に落ちた二人はマルケ王の城中で逢引を重ねるが見つかり、トリスタンは友人メロートの刃に傷つく。瀕死のトリスタンは従者クルヴェナルとともにイゾルデがやってくるのを待つのだが…。</p> <p>[出演]ルネ・コロ（トリスタン／テノール）ヨハンナ・マイアー（イゾルデ／ソプラノ）ヘルマン・ベヒト（クルヴェナル／バリトン）ハンナ・シュヴァルツ（ブランゲーネ／メゾ・ソプラノ）マッティ・サルミネン（マルケ王／バス）ロベルト・シュンク（メロート &amp; 若い水夫の声／テノール）ヘルムート・パンブフ（牧童／テノール）マルティン・エーゲル（舵手／バリトン）</p> <p>[演目]リヒャルト・ワーグナー：3幕の楽劇『トリスタンとイゾルデ』[台本]リヒャルト・ワーグナー[演出・装置・衣裳・照明・映像監督]ジャン＝ピエール・ポネル[指揮]ダニエル・バレンボイム[演奏]パイロイト祝祭劇場管弦楽団及び同合唱団[合唱指揮]ルベルト・バラッチュ[収録]1983年10月パイロイト祝祭劇場（パイロイト）[映像監督]ブライアン・ラージ</p> <p>■字幕／全3幕：約4時間8分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
バーンスタインのワーグナー『トリスタンとイゾルデ』第3幕	4、4、9、9、20、20、26、26	バーンスタイン生誕100年を機に、あの伝説の名演がついに！1981年に一幕ずつ3回に分けて入念に上演された渾身のワーグナー『トリスタンとイゾルデ』、その第3幕。	<p>レナード・バーンスタイン（1918－1990）の『トリスタンとイゾルデ』といえば、クラシック・レコード史に燦然と輝く名演であり、彼が全曲を演奏した唯一のワーグナーのオペラです。1981年、ミュンヘンのヘラクレスザールで、1月・4月・11月に1幕ずつ、3回に分けて演奏会形式で上演して録音。全曲盤としてフィリップス・レーベルから発売され絶賛を得ました。日本でも1984年度のレコード・アカデミー賞大賞を受賞しています。長くその録音だけで伝えられてきた伝説の名演ですが、バーンスタイン生誕100年を迎えた2018年、上演時のテレビ中継が映像化され、大きな話題を呼んだ貴重映像、その第3幕です。</p> <p>オーケストラの背後の空間で歌う歌手たちは簡素な衣裳をまとっており、小道具も目立った動きの演出もないシンプルな演奏会形式の上演は、観る者をひたすら音楽に集中させます。ここでのバーンスタインの音楽づくりの最大の特徴は、止まってしまうかのような遅いテンポ設定。しかし、バーンスタインがいつもそうであるように、それは奇を衒った恣意的なデフォルメではなく、スコアを読み込んだ、合理的かつ説得力のある解釈となっており、聴くものの心を鷲掴みにします。</p> <p>トリスタン役は、1976年にパイロイト音楽祭デビューを果たした絶頂期のペーター・ホフマン。1970～80年代を代表するヘルデンテノールが、その神々しい美声を聴かせます。イゾルデ役にはヒルデガルト・ベレンス。ヘルベルト・フォン・カラヤンに見出されて1977年ザルツブルク音楽祭の『サロメ』でセンセーショナルな成功を収めてまもないライジング・スターでした。清らかな声の丁寧な歌いぶりが印象的です。最後の「愛の死」を、この遅いテンポの中でドラマとしての緊張感を維持したまま歌いきるのは、なかなかできることではありません。全3幕を数ヶ月おきに1幕ずつ上演して録音するという、レコード制作を目的としたプランならではの発想は、練習に割ける時間や歌手たちの体力を考えると実に理想的。それでも、ハンフリー・パートン著のバーンスタイン伝によれば、第3幕の録音時にはホフマンもベレンスも体調を崩していたといいますが、映像からはそんな気配は微塵も感じられません。ユダヤ人であるバーンスタインが、ナチ発祥の地であるミュンヘンでワーグナーを演奏することは、バーンスタイン自身の特別な意思の有無にかかわらず、少なからず意味を持って迎えられたはず。ちなみに、ズービン・メータがイスラエル・フィルのコンサートで『トリスタンとイゾルデ』の前奏曲を演奏して客席が怒号渦巻く大混乱となったあの「事件」は、この上演と同じ1981年のことでした。1972年ミュンヘン・オリンピックでのパレスチナ・ゲリラによるイスラエル選手襲撃テロの記憶もまだまだ生々しかったはず。しかしバーンスタインは、「音楽の歴史における中心的な存在。車輪の心棒」と位置づけるこの作品に、若い頃から魅了されており、コンサートやテレビ番組で部分的に演奏し、ヴィーラント・ワーグナーとパイロイト音楽祭での上演計画を立てたことさえあると言われます。つまり長年の念願がかなった上演が、このミュンヘンでのプロダクションでした。指揮をするバーンスタインの表情からも、そんな情熱や気迫が、ありありと伝わってきます。</p> <p>[出演]ペーター・ホフマン（トリスタン／テノール）ヒルデガルト・ベレンス（イゾルデ／ソプラノ）イヴォンヌ・ミント（ブランゲーネ／メゾ・ソプラノ）ヘルント・ヴァイクル（クルヴェナル／バリトン）ハンス・ゾーティン（マルケ王／バス）ヘルベルト・シュタインバッハ（メロート／テノール）ハインツ・ツェドニク（牧童／テノール）ライムント・グルムバッハ（舵手／バリトン）</p>
バーンスタインのワーグナー『トリスタンとイゾルデ』第2幕	4、4、9、9、20、20、26、26	バーンスタイン生誕100年を機に、あの伝説の名演がついに！1981年に一幕ずつ3回に分けて入念に上演された渾身のワーグナー『トリスタンとイゾルデ』、その第2幕。	<p>レナード・バーンスタイン（1918－1990）の『トリスタンとイゾルデ』といえば、クラシック・レコード史に燦然と輝く名演であり、彼が全曲を演奏した唯一のワーグナーのオペラです。1981年、ミュンヘンのヘラクレスザールで、1月・4月・11月に1幕ずつ、3回に分けて演奏会形式で上演して録音。全曲盤としてフィリップス・レーベルから発売され絶賛を得ました。日本でも1984年度のレコード・アカデミー賞大賞を受賞しています。長くその録音だけで伝えられてきた伝説の名演ですが、バーンスタイン生誕100年を迎えた2018年、上演時のテレビ中継が映像化され、大きな話題を呼んだ貴重映像、その第2幕です。</p> <p>オーケストラの背後の空間で歌う歌手たちは簡素な衣裳をまとっており、小道具も目立った動きの演出もないシンプルな演奏会形式の上演は、観る者をひたすら音楽に集中させます。ここでのバーンスタインの音楽づくりの最大の特徴は、止まってしまうかのような遅いテンポ設定。しかし、バーンスタインがいつもそうであるように、それは奇を衒った恣意的なデフォルメではなく、スコアを読み込んだ、合理的かつ説得力のある解釈となっており、聴くものの心を鷲掴みにします。</p> <p>トリスタン役は、1976年にパイロイト音楽祭デビューを果たした絶頂期のペーター・ホフマン。1970～80年代を代表するヘルデンテノールが、その神々しい美声を聴かせます。イゾルデ役にはヒルデガルト・ベレンス。ヘルベルト・フォン・カラヤンに見出されて1977年ザルツブルク音楽祭の『サロメ』でセンセーショナルな成功を収めてまもないライジング・スターでした。清らかな声の丁寧な歌いぶりが印象的です。最後の「愛の死」を、この遅いテンポの中でドラマとしての緊張感を維持したまま歌いきるのは、なかなかできることではありません。全3幕を数ヶ月おきに1幕ずつ上演して録音するという、レコード制作を目的としたプランならではの発想は、練習に割ける時間や歌手たちの体力を考えると実に理想的。それでも、ハンフリー・パートン著のバーンスタイン伝によれば、第3幕の録音時にはホフマンもベレンスも体調を崩していたといいますが、映像からはそんな気配は微塵も感じられません。ユダヤ人であるバーンスタインが、ナチ発祥の地であるミュンヘンでワーグナーを演奏することは、バーンスタイン自身の特別な意思の有無にかかわらず、少なからず意味を持って迎えられたはず。ちなみに、ズービン・メータがイスラエル・フィルのコンサートで『トリスタンとイゾルデ』の前奏曲を演奏して客席が怒号渦巻く大混乱となったあの「事件」は、この上演と同じ1981年のことでした。1972年ミュンヘン・オリンピックでのパレスチナ・ゲリラによるイスラエル選手襲撃テロの記憶もまだまだ生々しかったはず。しかしバーンスタインは、「音楽の歴史における中心的な存在。車輪の心棒」と位置づけるこの作品に、若い頃から魅了されており、コンサートやテレビ番組で部分的に演奏し、ヴィーラント・ワーグナーとパイロイト音楽祭での上演計画を立てたことさえあると言われます。つまり長年の念願がかなった上演が、このミュンヘンでのプロダクションでした。指揮をするバーンスタインの表情からも、そんな情熱や気迫が、ありありと伝わってきます。</p> <p>[出演]ペーター・ホフマン（トリスタン／テノール）ヒルデガルト・ベレンス（イゾルデ／ソプラノ）イヴォンヌ・ミント（ブランゲーネ／メゾ・ソプラノ）ヘルント・ヴァイクル（クルヴェナル／バリトン）ハンス・ゾーティン（マルケ王／バス）ヘルベルト・シュタインバッハ（メロート／テノール）</p> <p>[演目]リヒャルト・ワーグナー：3幕の楽劇『トリスタンとイゾルデ』第2幕（演奏会形式）[台本]リヒャルト・ワーグナー[指揮]レナード・バーンスタイン[演奏]バイエルン放送交響楽団[装置&amp;衣裳]ゲルト・クラウス[収録]1981年4月27日ヘラクレスザール（ミュンヘン）[映像監督]カールハインツ・フンドルフ</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
バーンスタインのワーグナー『トリスタンとイゾルデ』第1幕	4、4、9、9、20、20、26、26	バーンスタイン生誕100年を機に、あの伝説の名演がついに！1981年に一幕ずつ3回に分けて入念に上演された渾身のワーグナー『トリスタンとイゾルデ』、その第1幕。	<p>レナード・バーンスタイン（1918－1990）の『トリスタンとイゾルデ』といえば、クラシック・レコード史に燦然と輝く名演であり、彼が全曲を演奏した唯一のワーグナーのオペラです。1981年、ミュンヘンのヘルクレスザールで、1月・4月・11月に1幕ずつ、3回に分けて演奏会形式で上演して録音。全曲盤としてフィリップス・レーベルから発売され絶賛を得ました。日本でも1984年度のレコード・アカデミー賞大賞を受賞しています。長くその録音だけで伝えられてきた伝説の名演ですが、バーンスタイン生誕100年を迎えた2018年、上演時のテレビ中継が映像化され、大きな話題を呼んだ貴重映像、その第1幕です。</p> <p>オーケストラの背後の空間で歌う歌手たちは簡素な衣裳をまとっており、小道具も目立った動きの演出もないシンプルな演奏会形式の上演は、観る者をひたすら音楽に集中させます。ここでのバーンスタインの音楽づくりの最大の特徴は、止まってしまうかのような遅いテンポ設定。しかし、バーンスタインがいつもそうであるように、それは奇を衒った恣意的なデフォルメではなく、スコアを読み込んだ、合理的かつ説得力のある解釈となっており、聴くものの心を鷲掴みにします。第1幕のドレス・リハーサルを見た最晩年のカール・ベームは、「だれかがワーグナーの書いたとおりにこの音楽を演奏しようとしたのは、これが初めてだ」と、彼流の表現で賛辞を贈ったと言われます。実際、やはり名演の誉れ高いバイロイトでのベームの録音（1966年）と比べると、「前奏曲」だけでも、ベームが10分半、バーンスタインが14分半と、テンポが極端に異なります（全体でも、ベーム約215分に対してバーンスタイン約260分）。</p> <p>トリスタン役は、1976年にバイロイト音楽祭デビューを果たした絶頂期のペーター・ホフマン。1970～80年代を代表するヘルデンテノールが、その神々しい美声を聴かせます。イゾルデ役にはヒルデガルト・ペーレンス。ヘルベルト・フォン・カラヤンに見出されて1977年ザルツブルク音楽祭の『サロメ』でセンセーショナルな成功を収めてまもないライジング・スターでした。清らかな声の丁寧な歌いぶりが印象的です。最後の「愛の死」を、この遅いテンポの中でドラマとしての緊張感を持続したまま歌いきるのは、なかなかできることではありません。全3幕を数ヶ月おきに1幕ずつ上演して録音するという、レコード制作を目的としたプランならではの発想は、練習に割ける時間や歌手たちの体力を考えると実に理想的。</p> <p>ユダヤ人であるバーンスタインが、ナチ発祥の地であるミュンヘンでワーグナーを演奏することは、バーンスタイン自身の特別な意思の有無にかかわらず、少なからず意味を持って迎えられたはず。ちなみに、ズーピン・メータがイスラエル・フィルのコンサートで『トリスタンとイゾルデ』の前奏曲を演奏して客席が怒号渦巻く大混乱となったあの「事件」は、この上演と同じ1981年のことでした。1972年ミュンヘン・オリンピックでのパレスチナ・ゲリラによるイスラエル選手襲撃テロの記憶もまだまだ生々しかったはず。しかしバーンスタインは、「音楽の歴史における中心的な存在。車輪の心樑」と位置づけるこの作品に、若い頃から魅了されており、コンサートやテレビ番組で部分的に演奏し、ヴィーラント・ワーグナーとバイロイト音楽祭での上演計画を立てたことさえあると言われます。つまり長年の念願がかなった上演が、このミュンヘンでのプロダクションでした。指揮をするバーンスタインの表情からも、そんな情熱や気迫が、ありありと伝わってきます。</p>
ゼッフィレツリの映画『道化師』	1、1、7、7、12、12、17、17、25、25	夫は妻を愛し、妻は自由を求める。道化師は心で泣きながら観客を笑わせなければならぬ…。レオンカヴァルロの代表作であると同時に、イタリア・ヴェリズモ・オペラの最高傑作として名高い『道化師』を、『ロミオとジュリエット』『永遠のマリア・カラス』などの名匠フランコ・ゼッフィレツリが映画化。	<p>[出演]ペーター・ホフマン（トリスタン／テノール）ヒルデガルト・ペーレンス（イゾルデ／ソプラノ）イヴォンヌ・ミントン（ブランゲーネ／メゾ・ソプラノ）ヘルント・ヴァイクル（クルヴェ）カニオ（ブラシド・ドミンゴ、ネッダにテレサ・ストラータスを配し、ジョルジュ・ブレートルが指揮するイタリア・オペラの殿堂ミラノ・スカラ座のオーケストラが、緊迫したストーリーをドラマティックに盛り上げます。若きドミンゴの絶唱「衣装をつける」は必見。</p> <p>愛するが故の嫉妬が生んだ男と女の愛憎悲劇がゼッフィレツリの映像美で堪能できる、手に汗握る迫真の『道化師』です。</p> <p>[ストーリー]旅回りの一座がやってくる。座長カニオの妻ネッダは村の青年シルヴィオと逢瀬を重ねる仲。ネッダに手ひどく鞭打たれたトニオは2人の逢引をカニオに知らせる。激怒するカニオは怒りも悲しみも隠して道化を演じなければならぬと歌う。村人お待ちかねの芝居が始まる。現実と芝居の見境がつかなくなったカニオは、舞台上でネッダとシルヴィオを殺す。混乱の中、カニオは「芝居はこれでおしまい」とつぶやき幕。</p> <p>[出演]ブラシド・ドミンゴ（カニオ（劇中劇のバリアッチョ）／テノール）テレサ・ストラータス（ネッダ（劇中劇のコロンビーナ）／ソプラノ）ホアン・ボンス（トニオ（劇中劇のタデオ）／バリトン）フロリンド・アンドレオリ（ベッパ（劇中劇のアレッキオー）／テノール）アルベルト・リナルディ（シルヴィオ／バリトン）</p> <p>[演目]ルッジェーロ・レオンカヴァルロ：プロローグと2幕のドラマ『道化師』[台本]ルッジェーロ・レオンカヴァルロ[原案]新聞の犯罪記事に基づく</p> <p>[監督]フランコ・ゼッフィレツリ[装置]ジャンニ・クラランタ[衣裳]アンナ・アンニ</p> <p>[指揮]ジョルジュ・ブレートル[演奏]ミラノ・スカラ座管弦楽団及び合唱団[合唱指揮]ロマーノ・ガンドルフィ</p> <p>[制作]1982年イタリア・ドイツ映画</p> <p>■字幕／全1幕(映画版):約1時間13分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
アレーナ・ディ・ヴェローナ2012『アイダ』	2、2、 6、6、 8、8、 12、12	アレーナ・ディ・ヴェローナといえは『アイダ』。100年前の第1回音楽祭のプロダクションを再現した、壮大な舞台で味わうヴェルディ・スベクタクル！	<p>『ロミオとジュリエット』の舞台でもあるヴェローナの街の夏の風物詩が、アレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭です。2,000年前に建造された古代ローマの円形闘技場の遺跡を利用した1万6千人収容の巨大劇場で、オペラや、最近ではバレエ、コンサートが上演される野外音楽祭。そのスタートは、1913年、ジュゼッペ・ヴェルディの生誕100年を記念して上演された『アイダ』でした。以来、2度の大戦中の数年ずつの中止を除いて毎年開かれているこの音楽祭の、代名詞ともいえる象徴的演目となっています。番組では、ヴェルディ生誕200年を翌年に控えた2012年に、100年前の第1回の演出を再現した上演の模様をお届けします。</p> <p>100年前のプロダクションとはいえ、その舞台の壮麗さは、現在の同音楽祭の定番であるフランコ・ゼッフィレッリ演出版に勝るとも劣りません。背景となるアレーナのすり鉢状の石段もうまく活用したスケール大きな舞台に、カラフルな円柱やオペリスク、スフィンクスのある古代エジプトが出現。有名な第2幕の凱旋の場は、大勢のエキストラや本物の馬も登場する野外劇場ならではの演出で、絢爛豪華な祝祭的スベクタクルを味わうことができます。</p> <p>アイダ役には2001年にプッセートの「ヴェルディの声」国際コンクールで第1位を獲得した中国人ソプラノ、ヘー・ホイが登場。しなやかさを備えたしっかりしたボディのある声で、世界各地の劇場から引っ張りだこという人気ぶりを実感できる存在感を示しています。</p> <p>存在感という意味で、彼女の相手役のマルコ・ベルティ（ラダメス）以上に圧倒的なのが、アイダの父アマナズロ役のアンプロージョ・マエストリです。この経験豊富なヴェテランが登場するだけで、巨大な舞台が締まる、さすがの貴族です。</p> <p>そして、野外劇場ながら、そんな名歌手たちの歌声がマイクなしで楽しめる音響の良さもアレーナ・ディ・ヴェローナの凄いとこ。すり鉢状の構造のおかげなのか、ステージ上で普通に話している声も、楕円形の闘技場の反対側の客席でもはっきり聞き取れるほどなのです。その良好なアコースティックの一端は、番組の音声からも感じていただけるのではないのでしょうか。</p> <p>オペラの物語の舞台は古代エジプト。若い將軍ラダメスは敵国エチオピア王の娘アイダと密かに愛し合っています。しかし、アイダに軍事機密を漏らしたために、謀反人として捕らえられるラダメス。臣下である彼に一方的に思いを寄せるエジプトの女王アムネリスは、自分を愛せば命を救うと迫りますが、ラダメスはアイダへの思いを貫きます。ラダメスとアイダは、永遠の愛を誓い、地下牢で死を待つのでした。</p> <p>[出演]和慧(ヘー・ホイ) (アイダ/ソプラノ) マルコ・ベルティ (ラダメス/テノール) アンドレア・ウルブリヒ (アムネリス/メゾ・ソプラノ) アンプロージョ・マエストリ (アマナズロ/バリトン) フランチェスコ・エッレロー・ダルテニャ (ランフィス/バス) ロベルト・タリアヴィーニ (エジプト国王/バス) アントネット・チェロン (使者/テノール) アントネット・トレヴィサン (巫女/メゾ・ソプラノ) ミルナ・カマラ (ダンサー) アレーナ・ディ・ヴェローナ・バレエ団 (舞踊監督: マリア・グラツィア・ガルフォリ)</p> <p>[演目]ジュゼッペ・ヴェルディ: 4幕のオペラ『アイダ』[台本]アントーニオ・ギスランツォーニ[原案]オーギュスト・マリエット[演出]ジャンフランコ・デ・ボジオ (1913年「第1回アレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭」)</p>
TUTTO VERDI #13『レニャーノの戦い』	1、4、 4、7、 7、10、 10	イタリア・オペラ最大の作曲家ジュゼッペ・ヴェルディ生誕200年を記念して、全てのオペラとレニャーノの戦いを収録したプロジェクト「TUTTO VERDI」より第13作『レニャーノの戦い』。	<p>神聖ローマ皇帝となったドイツのホーエンシュタウヘン家のフリードリヒ1世(通称赤髯公、バルバロッサ)は、北イタリア都市国家を武力で押さえつけるが、彼ら諸都市はロンバルディア同盟を結び反乱を起こす。レニャーノの戦いとは1176年イタリア都市同盟軍が神聖ローマ帝国軍を破った戦闘。原作はジョゼフ・メリの戯曲『トゥールーズの戦い』から。戦死したと伝えられた一人の勇気ある若者。その不幸な報せを聞いた恋人は、父親から命じられるままに別の男と結婚する。ところがある日、戦死したはずの若者が故郷に帰還する。『レニャーノの戦い』は1849年に初演され、当時のリソルジメント(イタリア国家統一運動)の気運を当て込んだ作品。現在ではヴェルディ初期作品の中でも特に上演が珍しい。ルネッサンス風の巨大な絵画が効果的に使われ、大プリマドンナ、ディミトラ・テオドッシュウの熱唱も熱い、威風堂々たる愛国オペラだ。</p> <p>[出演]ディミトラ・テオドッシュウ (リーダ/ソプラノ) アンドリュエ・リチャーズ (アッリーゴ/テノール) レオナルド・ロベス・リナレス (ロランド/バリトン) エンリーコ・ジュゼッペ・イオーリ (フェデリコ・バルバロッサ/バス) フランチェスコ・ムジヌ (第1執政官/バス) フェデリコ・ベネッティ (第2執政官/バス) ガブリエーレ・サゴーナ (コモの市長/バス) ジョヴァンニ・ガリアルド (マルコヴァルド/バリトン) シャロン・ピエルフェデリチ (イメルダ/メゾ・ソプラノ) アレッサンドロ・デ・アンジェリス (伝令/テノール) ニコロ・バスコリ (アッリーゴの従者/テノール)</p> <p>[演目]ジュゼッペ・ヴェルディ: 4幕のトラジェディア・リリーカ『レニャーノの戦い』[台本]サルヴァトーレ・カンマラーノ[原作]ジョゼフ・メリの戯曲『トゥールーズの戦い』[演出]ルッジェーロ・カッパッチョ[装置 &amp; 衣裳]カルロ・サーヴィ、ミンモ・バラディーノ、マシュー・スベンダー[照明]ニーノ・ナボレターノ[指揮]ボリス・プロット[演奏]トリエステ・ジュゼッペ・ヴェルディ歌劇場管弦楽団及び同合唱団[合唱指揮]パオロ・ヴェロ[映像監督]ティツィアーノ・マンチーニ[収録]2012年2月 &amp; 3月ジュゼッペ・ヴェルディ劇場 (トリエステ)</p> <p>■字幕/全4幕: 約2時間</p>

## コンサート

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
内田光子『モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番』	5、5、 9、9、 15、 15、 27、27	疾走する悲しみ——。現代最高のピアニストがモーツァルトの故郷の名門楽団と生み出すデモーニッシュな奔流。	<p>西洋音楽が日本に入ってから150年足らず。この短い間に、指揮者では小澤征爾、そしてピアノでは内田光子という世界に冠たる現代最高の演奏家が出現したのは驚くべきことです。内田は1980年代から、「モーツァルトの女王」という世界的評価を得て以来この作曲家のチクルスを継続。今回の番組で共演、弾き振りしているのはモーツァルトの故郷の室内オーケストラ、カメラータ・ザルツブルクです。殊にこの作曲家においては80～90年代、巨匠シャーンドル・ヴェーグに鍛えられた名門で、この演奏では部分的に古楽スタイルを採り入れ、硬いバチのティンパニやナチュラルトランペットを使用しています。</p> <p>少しオーバーでは？と思うほどの豊かな表情で繰り出す指揮ぶりが物語るように、内田はモーツァルトのすべてを感じとり、それをピアノにオケに、すべての音へと転化します。そこからキビキビした流れが生まれ、どんなフレーズもはっきりしたキャラクターやニュアンスで特性づけます。密度の濃さがモーツァルトの天才と古典美を余さず描くのです。</p> <p>フリーの音楽家となってウィーンに定住、自身のコンサートのためにピアノ協奏曲を量産してきたモーツァルトも、このK.466二短調では一段と充実を極めます。それもこのジャンルでの初めての「短調」で。彼の短調は、あたかも自分の内の底なしのバトスに潜っていくような趣がありますが、特に二短調は『ドン・ジョヴァンニ』や『レクイエム』等の名作の調性。内田たちの演奏はモーツァルトのバトスをとらえた、当代最高レベルの演奏と言えるでしょう。</p> <p>ピアノシモでベースの音が地を抉り、ヴァイオリンが不穏にさざめく冒頭から、すべてを明確に造型するよりも彼らは憑かれたようにこのデモーニッシュな音楽に没入、疾駆していきます。そして続く、夢見のようなロマンティックな第2楽章はなんと安らかに感じるのか。フィナーレは再び闇と光が息いつ追われつ、最後のコーダの“オペラの”エンディングはいかにもモーツァルト。かつて評論家の小林秀雄はモーツァルトの音楽を「疾走する悲しみ」と言いましたが、この内田たちの演奏を聴くと、それを想起せずにはいられません。</p> <p>【ピアノ&amp;指揮】 内田光子 【管弦楽】 カメラータ・ザルツブルク  【曲目】 モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番二短調K.466（カデンツァはベートーヴェン作のものを演奏）  【収録】 2001年 ザルツブルク モーツァルトフェスティバル大ホール 【監督】 ホラント・H・ホールフェルト ■約39分</p>
内田光子『モーツァルト：ピアノ協奏曲第13番』	5、5、 9、9、 15、 15、 27、27	モーツァルトの女王がモーツァルトの故郷の名門楽団を弾き振り。表情豊かに自由に羽ばたくモーツァルト演奏の真髄がここに	<p>西洋音楽が日本に入ってから150年足らず。この短い間に指揮者では小澤征爾、そしてピアノでは内田光子という、世界に冠たる現代最高の演奏家が出現したのは驚くべきことです。内田は1980年代から「モーツァルトの女王」と呼ばれるほどの世界的な評価を得ていますが、1986～87年のザントリーホール・オープニング・シリーズにおける、彼女とイギリス室内管弦楽団とのピアノ協奏曲全曲演奏のことを覚えているファンも多いことでしょう。以来この作曲家のチクルスを継続している内田が今回の番組で共演、弾き振りしているのは、モーツァルトの故郷ザルツブルクの室内オーケストラ、カメラータ・ザルツブルク。殊にこの作曲家においては80～90年代、かの巨匠シャーンドル・ヴェーグにとことん鍛えられた名門です。この演奏では部分的に古楽スタイルを採り入れ、硬いバチのティンパニやナチュラルトランペットを使用。</p> <p>豊かな表情をまじえて繰り出す指揮ぶりが物語るように、内田はモーツァルトのすべてを全身で感じとり、それをピアノにオケに、すべての音へと転化します。そこから隙のないキビキビした流れが生まれ、どんなフレーズもはっきりしたキャラクターやニュアンスで特性づけます。その濃密さが自由に羽ばたくモーツァルトの天才と古典美を余さず描くのです。</p> <p>モーツァルトは幼少の頃に父と旅をしてヨーロッパ音楽の多様なスタイルを吸収し、青年期のザルツブルクでの宮仕えに嫌気がさした後、史上初のフリー音楽家としてウィーンに定住。自身のコンサートのためにピアノ協奏曲を量産、このジャンルの様式を確立しました。このシンブルで明朗なK.415八長調はその初期のものです。内田&amp;カメラータ・ザルツブルクにかかると第1楽章からモーツァルト特有の唐突な変転を確実にとらえ、聴き手をドキッとさせつつ、壮麗で喜びにあふれた演奏を展開します。作為のない自然な流れの中で転調を繰り返す、思いがけない絶妙な色合いに移り変わっていく第2楽章や、闊達な rond 主題にはさまれた短調部分の悲嘆にくれるような味わいなど、コントラストが鮮やかなフィナーレも聴きものです。</p> <p>【ピアノ&amp;指揮】 内田光子 【管弦楽】 カメラータ・ザルツブルク  【曲目】 ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ピアノ協奏曲第13番八長調K.415（カデンツァはモーツァルトのオリジナルを演奏）  【収録】 2001年 ザルツブルク モーツァルトフェスティバル大ホール 【映像監督】 ホラント・H・ホールフェルト ■約33分</p>



番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
七つの大罪〜アラルコンのモンテヴェルディ作品集	23、 23、 26、 26、 28、28	生誕450年を記念してモンテヴェルディゆかりのヴェネツィア・ドゥカレ宮殿で収録。16の倫理観をキーワードに切り取った、モンテヴェルディの大罪と美徳。	<p>2017年は作曲家クラウディオ・モンテヴェルディ（1567～1643）の生誕450年のお祝いの年。世界中でさまざまな催しが行なわれていますが、中でも、ヴェネツィアのドゥカレ宮殿で収録されたこの映像は、非常に興味深いものとして記憶される企画のひとつになりそうです。</p> <p>ヴェネツィアは、モンテヴェルディがサン・マルコ寺院の楽長として晩年の30年間を過ごしたゆかり深い都市ですが、この映像が収録された、ヴェネツィア総督の私的礼拝堂は長い間一般に公開されておらず、モンテヴェルディの音楽がここで収録されるのも、もちろん初めてです。メモリアル・イヤーに関わる特別な許可によって実現したのがこの番組なのです。</p> <p>演奏内容にも独自の視点の工夫が凝らされています。キリスト教の「7つの大罪（罪源）」にぞらえて、「嫉妬」「忍耐」「憤怒」「慈悲」「色欲」「純潔」「傲慢」「謙譲」といった、人間の六罪とそれに対置される美徳を表す16個のキーワードによって、モンテヴェルディの作品に描かれたさまざまな倫理観、世界観を切り取ったオムニバス構成です。『オルフェオ』『ウリッセの帰郷』『ポッパアの戴冠』の3つのオペラはもちろんのこと、前・後期のマドリガーレも取り上げているので、ルネサンス音楽を集大成し「バロック音楽の扉を開いたモンテヴェルディの、さまざまな音楽スタイルを自然に俯瞰することができます。また、マドリガーレ曲にも演出や演技が加えられているので、全16曲をまるでひとつの音楽劇のように楽しむことができますのも、映像ならではの利点でしょう。</p> <p>演奏のアンサンブル・カベラ・メディテラネアは2005年にアルゼンチン指揮者のレオナルド・ガルシア・アラルコンによって創設されました。メディテラネア（Mediterranea）というグループ名が示すように、地中海沿岸地方の音楽を探求し、バロック音楽に、西ヨーロッパの伝統とは異なるアプローチを提示することを目的にスタートしています。それを反映しているのが感じられるハーモニー感独特で、旧様式の対位法的なマドリガーレでも、お行儀のいいばかりの美しい合唱とはひと味違う、エキサイティングな響きを聴かせてくれます。</p> <p>[演目] 【希望】クラウディオ・モンテヴェルディ：希望よ、お前が来て（歌劇『ポッパアの戴冠』第1幕第4場）【浪費】クラウディオ・モンテヴェルディ：苦しみが甘美なものならば（『優美なるアリオソ集』第4巻）【怠惰】クラウディオ・モンテヴェルディ：誰の声だ？（歌劇『ポッパアの戴冠』第1幕第2場） 【嫉妬】クラウディオ・モンテヴェルディ：仲間たちよ、聞いたか？（歌劇『ウリッセの帰郷』第3幕第4場）【純潔】クラウディオ・モンテヴェルディ：私は恋に燃えているが（マドリガーレ集第8巻）【憤慨】バルバラ・ストロツィ：何ができるのだろう【傲慢】クラウディオ・モンテヴェルディ：わたしは決意した（歌劇『ポッパアの戴冠』第1幕第9場）【強欲】クラウディオ・モンテヴェルディ：今やセネカは死んだのだ（歌劇『ポッパアの戴冠』第2幕第6場）【謙譲】クラウディオ・モンテヴェルディ：おお、目の見えない者たちよ（倫理的・宗教的な森） 【暴食】クラウディオ・モンテヴェルディ：牧人は、羊の群れを率いながら（歌劇『ウリッセの帰郷』第2幕第3場）【忍耐】クラウディオ・モンテヴェルディ：心せよ、死すべき者たちよ（歌劇『ウリッセの帰郷』第5幕第2場）【色欲】クラウディオ・モンテヴェルディ：そう、私は近きます（マドリガーレ集第4巻）【恐怖】クラウディオ・モンテヴェルディ：墓を開いて（『死んでしまいたい』より～『音楽の戯れ』）【慈悲】クラウディオ・モンテヴェルディ：私はオルフェオ（歌劇『オルフェオ』第3幕）【憤怒】クラウディオ・モンテヴェルディ：去れ！残酷</p>
佐渡裕&トーンキエンストラ管『マラー：交響曲第5番』	20、 20、 22、 22、 24、 24、 28、28	黄金時代を築いた、ウィーンの由緒ある名門オーケストラと情熱の日本人指揮者。現代の名コンビが放つ、マラーの真髄！	<p>芸術の都、ウィーン。トーンキエンストラ管弦楽団はオーストリアのニーダーエスターライヒ州ザンクト・ペルテンとウィーンを本拠とするオーケストラで、その起源はハイドンやモーツァルトらが活躍していた18世紀頃まで遡ります。ひと昔前までは天下のウィーン・フィルに一步譲るところがありましたが、近年ファビオ・リウヰジやクリスチャン・ヤルヴィら名指揮者に鍛えられ、2015年から首席指揮者を務める佐渡裕とともに黄金時代を迎えたと評判です。</p> <p>当番組ではその「名コンビ」による初ドイツ・ツアーから、ハンブルクの新ホール、エルブフィルハーモニーで行われた公演をお送りします。</p> <p>ボヘミア生まれのユダヤ人であるマラーは、19世紀末から20世紀初頭をまたぐ大作作曲家としても、楽都再興を果たしたウィーン国立歌劇場の音楽監督としても、ウィーンとは切っても切れない存在。その彼の充実期に生まれた「第5交響曲」は、それまで以上に精緻な書法で書かれています。その語法、イントネーション、音色、バランスなどを熟知するトーンキエンストラ管は、見事にこの交響曲が内包するドラマを描き出していきます。</p> <p>一方の佐渡はこのウィーンで、マラーを十八番としたバーンスタインのアシスタントを務めた指揮者。情熱的ではあっても過剰に陥らない指揮のもと、メンデルスゾーン「結婚行進曲」をパロディにしたような第1楽章の「葬送行進曲」以下、無理なく自然に流れていきます。オーケストラの響きは柔らかく艶やか、どんなところでも品格を失わないあたりはさすがウィーンの楽団。マラーの苦悩、憧れ、アイロニー、歓喜などが自然に現れては消え、立奏する首席ホルンに導かれる第3楽章からは、香り立つ草原や森の息吹が、また、有名なアダージェット楽章では薄いヴェールの向こうから響くような、儚くも強い憧憬が胸をうちます。緻密で晴朗、活気あふれるフィナーレでの歓喜のあと、盛大なスタンディング・オベーションとなるのも当然と言えますしよ。</p> <p>大人のオーケストラが落ち着いて聴かせてくれるマラーの真髄をぜひお楽しみください。</p>
レオ・ヌッチ『ミラノ・スカラ座リサイタル』	1、4、 4、7、 7、10、 10	ヌッチのミラノ・スカラ座デビュー30周年記念コンサート。スカラ座でソロ・リサイタルを行えるアーティストは限られ、彼がミラノ市民にとっていかに特別な存在であるかがわかる映像	<p>。スカラ座合唱団出身のヌッチがリストとしてスカラ座デビューを果たしたのが1977年。この番組では、デビューとなった『セビリアの理髪師』のフィガロから、『二人のフォスカリ』『マクベス』『リゴレット』『イル・トロヴァトーレ』『椿姫』『仮面舞踏会』『ドン・カルロ』『オテロ』などヴェルディ作品の名アリアまで、まさに「ベスト・オブ・ヌッチ」の内容が楽しめる。</p> <p>[演目]ジョアキーノ・ロッシニ：歌劇『セビリアの理髪師』～フィガロのアリア「私は町のなんでも屋」、ガエタノ・ドゼツァティ：歌劇『ランメルモールのルチア』～エンリーコのアリア「酷で不吉な奇立ちが」/歌劇『愛の妙薬』～ベルコレのアリア「昔パリスがしたように」、ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇『二人のフォスカリ』～フランチェスコ・フォスカリのアリア「ああ年老いた心よ」/歌劇『マクベス』～マクベスのアリア「裏切り者め…憐れみも誉れも愛も」/歌劇『仮面舞踏会』～レナートのアリア「お前こそ心を汚す者」/歌劇『ドン・カルロ』～ロドリゴの死「わが生涯の最高の日」、ジャコモ・プッチーニ：歌劇『ジャンニ・スキッキ』～ジャンニ・スキッキのアリア「声は同じだった？…勝利だ」、ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇『オテロ』～イアゴの信条「無慈悲な神の命するまに」/歌劇『イル・トロヴァトーレ』～ルナー伯爵のアリア「君が微笑み」/歌劇『リゴレット』～リゴレットのアリア「悪魔め、鬼め」/歌劇『運命の力』～ドン・カルロのアリア「この中に私の運命がある…やはり助かった」/歌劇『椿姫』～ジェルモンのアリア「プロヴァンスの海と陸」、ウンベルト・ジョルダーノ：歌劇『アンドレア・シェニエ』～ジェラルドのアリア「祖国の敵」、フランチェスコ・パオロ・トスティ：君なんかもう愛していない、チェザレ・アンドレア・ピクシオ：マンマ [パリトン]レオ・ヌッチ[ピアノ]ジェイムズ・ヴォーン[収録]2007年1月15日ミラノ・スカラ座[映像監督]ティツィアーノ・マンチーニ ■字幕/約1時間33分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
メータ&ウィーン・フィル「ブッフピンダーのブラームス」	13、13、16、16、18、18、21、21、24、24	2015年3月ウィーンのエジクフェラインザールで行われたズービン・メータ指揮ウィーン・フィルによるブラームスの2つのピアノ協奏曲。ソリストには、ウィーンのパiano演奏の伝統を現代に引き継ぐ名手ルドルフ・ブッフピンダー。2016年10月ウィーン・フィル来日公演では同じ指揮者とソリストでブラームスのピアノ協奏曲第1番が演奏されました。	番組では、第2番が前半、第1番が後半というブッフピンダーお馴染みの順番で、繊細さと詩的な雰囲気をもつ第2番と、重厚さと若き作曲家の情熱あふれる第1番の対比が見どころ。ピアノ独奏を伴った交響曲と呼ばれるブラームスのピアノ協奏曲の雄大な世界をじっくりご覧いただけます。 ブラームスがイタリア旅行中に構想を得たという第2番は、堂々として味わい深いブッフピンダーのピアノと、ウィーン・フィルのホルンやチェロのソロの素晴らしさに注目。ブラームス青年期の第1番は、恩師シューマンへの敬意とクララの憧れが入り混じった作曲家の若き日の瑞々しい感性を、自筆譜から研究しているブッフピンダーは強靱な打鍵と重厚な音で表現します。 暗譜で指揮するメータは、ウィーン・フィルから美しい音色と重厚感、ブラームスの渋みと深みを引き出す、78歳とは思えない渾身の姿が印象的。ブッフピンダーの両手のクローズアップ、ライナー・ホーネックの名コンサートマスターぶり、さまざまな角度で映し出されるエジクフェラインなど、流麗なカメラワークも楽しい。  [演出]ヨハネス・ブラームス：ピアノ協奏曲第2番変ロ長調Op.83／ピアノ協奏曲第1番二短調Op.15 [指揮]ズービン・メータ[演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ルドルフ・ブッフピンダー（ピアノ） [収録]2015年3月8日エジクフェラインザール（ウィーン） [映像監督]カリーナ・フィッツ ■約1時間37分
ムターのモーツァルト「ピアノ三重奏曲集」	1、4、4、7、7、10、10	モーツァルト晩年の充実期に作曲された「ピアノ三重奏」。ムター、プレヴィン、そして若手のミュラー＝ショットの名手3人がモーツァルトの天才性を実感させる演奏を披露。	「モーツァルトはピアノ三重奏曲を自分の楽しみのために書いた」。ムターのその言葉を裏付けるような、華やかさと親密な軽やかさを併せ持つ見事な番組。 ピアノ協奏曲と室内楽の中間をいようなモーツァルトのピアノ三重奏曲3曲を、ヴァイオリンの女王アンネ＝ゾフィー・ムターと、指揮の巨匠でピアノの名手サー・アンドレ・プレヴィン（収録当時2人は夫婦）、この2人が認める若きチェリストのダニエル・ミュラー＝ショットが豊かに奏でた2006年4月公演。この時期は、モーツァルト生誕250年に因んで、ムターが特にモーツァルト作品を集中的に取り上げていました。会場はモーツァルトが演奏旅行で立ち寄って演奏したマントヴァのピビエナ劇場です。 3曲のピアノ三重奏曲（K.502、K.542、K.548）は、3曲ともモーツァルト晩年の1788年（32歳）作。K.548の冒頭、ムターのヴァイオリンの濃厚な表情、強いダイナミクスに、モーツァルトの演奏としては……？と思うのも束の間、ウィーンの銘器ベーゼンドルファーを弾くプレヴィンの甘く柔らかく、しかし小気味良いピアノとミュラー＝ショットの2人を支えるチェロと共に溶けあい、愉悅に充ちた演奏になっていきます。考えてみれば、モーツァルトが作曲したのは、宮仕えからフリーの音楽家としてウィーンに出た晩年の充実期。それだけに音楽の密度も強度も増して、むしろそうした演奏のエクスペリメンテーションが曲の陰影の深さ、濃さにつながっていくことに気づかされます。指や弓をアップするカメラワークも、より劇性をアップさせているのかもしれない。 K.542とK.502では、曲の性格もあって雄弁なピアノが主体となりますが、3人の掛け合いとやりとりは自由になり、その分音楽そのものが大きく飛翔。どの曲も速→遅→速という3楽章構成で、両端楽章での晴れやかに駆け抜ける愉悅と、不思議な転調で途中にふとさす影、また中間楽章のゆったりとした、美しくも透明な悲しみなど、3人の個性が存分に活きつつ、見事な「モーツァルト」像を描き出しています。彼の音楽はどこまでも美しい…天国的なものであることを改めて実感する番組です。  [演出]ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ピアノ三重奏曲第6番ハ長調K.548／ピアノ三重奏曲第5番ハ長調K.542／ピアノ三重奏曲第4番変ロ長調K.502[演奏]アンネ＝ゾフィー・ムター（ヴァイオリン）サー・アンドレ・プレヴィン（ピアノ）ダニエル・ミュラー＝ショット（チェロ） [収録]2006年4月ピビエナ劇場（マントヴァ） [映像監督]クリスティアン・クルト・ヴァイス ■約1時間4分
ムターのブラームス『ヴァイオリン・ソナタ全集』	13、13、16、16、18、18、21、21	ブラームスのヴァイオリン・ソナタ全曲映像としては初となる記念すべき番組。20年以上パートナーとして組んできたピアニスト、ランバート・オーキストとの円熟のアンサンブルも必見。	幼少期にカラヤンにその才能を見出され、「ヴァイオリンの女王」の名を欲しいままにしてきたアンネ＝ゾフィー・ムターによるブラームスのヴァイオリン・ソナタ全3曲。ブラームスのソナタは、ムターが音楽家として歩み始めた初期の時代から現在に至るまで、彼女にとって常にレパートリーの中心となってきたもの。近年ムターが日本を含む世界各地で開いているブラームスのリサイタルは、聴衆を感動の渦に包んできた。  [演出]ヨハネス・ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第2番イ長調Op.100／ヴァイオリン・ソナタ第1番ト長調Op.78『雨の歌』／ヴァイオリン・ソナタ第3番二短調Op.108 [ヴァイオリン]アンネ＝ゾフィー・ムター[ピアノ]ランバート・オーキスト [収録]2009年12月3日&4日ピリオテークザール（ボリング、バイエルン州オーバーバイエルン行政管区ヴァイルハイム＝ジョンカウ郡） [映像監督]アグネス・メス ■約1時間16分
ミラノ・スカラ座2012『ヴェルディ：レクイエム』	3、3、8、8、13、13、19、19	イタリアの文豪アレクサンドロ・マンゾーニを悼悼し、彼の一周忌である1874年5月22日、ミラノのサン・マルコ教会でヴェルディ自身の指揮、スカラ座を中心としたオーケストラと合唱団で初演。この番組は2012年8月ミラノ・スカラ座で収録された、まさに本家本元のレクイエム。	「スカラ座のマエストロ」ダニエル・バレンボイムの重厚な指揮、世界最高と謳われるスカラ座合唱団の力強い歌声は圧倒的だ。アニヤ・ハルテロス、エリーナ・ガランチャ、ヨナス・カウフマン、ルネ・バーベといった豪華歌手陣にも目が離せない。  [演出]ジュゼッペ・ヴェルディ：レクイエム[指揮]ダニエル・バレンボイム [演奏]ミラノ・スカラ座管弦楽団及び同合唱団、アニヤ・ハルテロス（ソプラノ）エリーナ・ガランチャ（メゾ・ソプラノ）ヨナス・カウフマン（テノール）ルネ・バーベ（バリトン） [合唱指揮]ブルーノ・カゾーニ[収録]2012年8月ミラノ・スカラ座 [映像監督]アンディ・ソマー ■字幕／約1時間35分
ボゴレリチのショパン『前奏曲第25番』	2、2、6、6、8、8、		[演出]フレデリック・フランソワ・ショパン：前奏曲第25番嬰ハ短調Op.45[ピアノ]イーヴォ・ボゴレリチ[収録]1987年4月～5月レア・ディ・ラッコネージ城（トリノ近郊） [映像監督]ホラント・H・ホルフェルト ■約9分

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ベルチャ四重奏団『ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第13番』	4、4、 9、9、 20、 20、 26、26	新時代を疾走する弦楽四重奏団として、今世界的に最も注目されるベルチャ四重奏団は、ルーマニア人の女性ヴァイオリニスト、コリーナ・ベルチャとポーランド人男性ヴィオラ奏者、クシシュトフ・ホジェルスキーを中心に、1994年英国国立音楽大学で結成。大阪国際室内コンクールとボルドー国際弦楽四重奏コンクールに優勝し、以来トントン拍子にキャリアを重ね、英国をベースとする弦楽四重奏団では最も名前が売れた若手弦楽四重奏団として高い人気を誇る。	ベートーヴェンの弦楽四重奏曲は、作曲家が30歳前後から死の前年まで書かれた全16曲と単一楽章の独立した作品として出版された『大フーガ』をあわせて、室内楽史上に君臨する比類なき傑作であり、ベートーヴェンの全創作を支える最も重要な柱といえるもの。そして弦楽四重奏曲全曲からはベートーヴェンの芸術と苦悩を知ることができる。この番組は、ベルチャ四重奏団がウィーン・コンツェルトハウスで12日間という短い期間で全曲を演奏した画期的なコンサートの記録。彼らが師事したアルバン・ベルク四重奏団以来のベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲映像であり、やはり彼らが師事したアマデウス四重奏団同様、第13番を、『大フーガ』を最終楽章にした初演版と、ベートーヴェンが死の直前に作曲した新たな最終楽章による出版社版の両方を弾いていることも特徴。つまり、この全集は、本当の意味で、ベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲を網羅した映像なのだ。現代の弦楽四重奏団らしいヴィヴィッドな響きと桁外れなテクニク、興奮せざるを得ない4声の戦いのような、しかし抜群にコントロールされたアンサンブル、そして涕々とたぎる名曲そのものに、血肉を、生々しい命を吹き込む情熱。脳が活発に活動し、心地よい疲労と音楽に酔いしれる喜び。まさに21世紀のベートーヴェン弦楽四重奏曲の姿がここにある。弦楽四重奏は映像でこそ、その面白さが初めてわかるのだ。  [演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第13番変ロ長調Op.130 [演奏] コリーナ・ベルチャ（第1ヴァイオリン） アクセル・シャハー（第2ヴァイオリン） クシシュトフ・ホジェルスキー（ヴィオラ） アントワーン・レデルラン（チェロ） [収録] 2012年5月2日、ウィーン・コンツェルトハウス [映像監督] フレデリック・デレク ■ 約40分
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第16番ハ長調	6、6、 10、 10、 14、 14		[演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第16番ハ長調Op.135 [演奏] ハーゲン四重奏団（第1ヴァイオリン：ルーカス・ハーゲン、第2ヴァイオリン：ライナー・シュミット、ヴィオラ：ヴェロニカ・ハーゲン、チェロ：クレメンス・ハーゲン） [収録] 2000年モーツァルトフェスティバル（ザルツブルク）「モーツァルト週間」 ■ 約31分
ブッフビンダー & ミュンヘン・フィル「ベートーヴェンとハイドン」	13、 13、 16、 16、 18、 18、 21、 21、 24、24	ロックダウン解除後のミュンヘン・フィル再開公演！ 名匠ブッフビンダーの弾き振りによる、ウィーン古典派ピアノ協奏曲の清新な世界	2020年5月末、ロックダウン解除直後のミュンヘン。ウィーン出身の名匠ピアニスト、ルドルフ・ブッフビンダーがドイツ屈指の楽団のひとつ、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団を弾き振った無観客の公演が行われました。曲はベートーヴェンとハイドンのピアノ協奏曲。新型コロナウイルス感染防止のため楽団は少人数で、ソーシャル・ディスタンスをとって離れて座りますが、名物コンサートマスターのヘルシユヴィチ率いる弦と、名人揃いの冴えた管によって始まるベートーヴェン、ピアノ協奏曲第1番のサウンドは厚みがあり、とてもそうは思えません。そしてベテラン、ブッフビンダーは悠然とオケに指示を出しつつ、粒立ちが明確な、しっとりとしたピアノの音を響かせます。長年ベートーヴェンの自筆譜を研究し、故郷のウィーン・フィルの弾き振りをはじめ、何百回と演奏したであろうマエストロにとって、この曲は勝手知ったる十八番の世界。それはオーケストラと遊ぶような風情の共演となりました。覇気ある第1楽章に続いて、細やかなピアノと優しいオケの響きで、晴れやかな夢の中を散歩しているような第2楽章は、コロナ禍を耐える今を忘れさせてくれるかのよう。そして、踊りたくなるような明朗活発な終楽章、殊にハンガリー風の中間部の勢いは心を駆り立てます。そして若きベートーヴェンのピアノ協奏曲からハイドンへと時代を遡ると、快活さ是一緒でも、簡明かつ愉悅を混えた世界に。しかし、聴いているうちに、先のベートーヴェンの第1番はハイドンのスタイルをベースとしていること、そこに自分の個性を盛り込んでいたことがハッキリ見え、全体の構成や、光から影への転調の妙など、2人が同じウィーンの花を吸っていたことに気付かされます。ブッフビンダーのウィーン風のきれいなタッチや、楽想の変わり目にテンポを落として曲想を明確にする手法などがそれを一段と浮き彫りにしています。彼らの演奏からは、古き良きものと新しさが手に手をとって歌い出す、清新にして味わい深い境地を感じずにはいられません。  [演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第1番ハ長調Op.15 フランツ・ヨーゼフ・ハイドン：ピアノ協奏曲二長調Hob. X VIII：11 [ピアノ、指揮] ルドルフ・ブッフビンダー [管弦楽] ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2020年5月30日 ガスタイク フィルハーモニー（ミュンヘン） [映像監督] ベネディクト・メロウ
ブッフビンダー & ウィーン・フィル『ベートーヴェン：皇帝』	5、5、 16、 16、 21、21	冒頭からピアノのカデンツァが華々しく登場するベートーヴェンの傑作。その壮大で力強い音楽は、まさに『皇帝』の名にふさわしい。ブッフビンダーとウィーン・フィルの白熱のアンサンブルも必見。	ウィーンで絶大な人気を誇る最も旬なピアニスト、ルドルフ・ブッフビンダーがウィーン・フィルを弾き振りして話題を呼んだベートーヴェンのピアノ協奏曲全曲映像より第5番『皇帝』。『皇帝』という標題は、その壮大で力強い音楽から、出版人のJ・B・クラマーが名付けたもの。冒頭からピアノのカデンツァが華々しく登場するという斬新な試みが印象的。1811年11月28日の初演はライプツィヒ・ゲヴァントハウスにてJ.F.シュナイターのピアノ独奏、そして翌年のウィーンでの演奏会ではベートーヴェンの弟子でピアノの教則本でも有名なチェルニーが独奏を務めたそうです。ベートーヴェンはブッフビンダーが長年、原典版研究に取り組んできた特別な作曲家で、演奏のとところどころに研究の集大成ともいえる深い解釈がうかがえます。その誠実な人柄を表すような温かみのあるピアノと、ウィーン・フィルのまろやかな音色がぴったりと一致した見事なコンビネーションは絶妙。美しく融け合ったハーモニーが極上の音響を誇るムジークフェアラインで天上の音楽さながらに響き渡ります。  [演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番変ホ長調Op.73『皇帝』 [ピアノ & 指揮] ルドルフ・ブッフビンダー [演奏] ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2011年5月5日～8日 ムジークフェアラインザール（ウィーン） [映像監督] カリーナ・フィッツ ■ 約42分



番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ブッフピンダー & ウィーン・フィル『ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第4番』	5、5、 16、 16、 21、21	独奏ピアノの柔らかな音で始まる冒頭から、オーケストラとピアノが対話するアンサンブルまで、みどころ満載のベートーヴェンの傑作。ブッフピンダーとウィーン・フィルの会話するような音楽が必見。	<p>ウィーンで絶大な人気を誇る最も旬なピアニスト、ルドルフ・ブッフピンダーがウィーン・フィルを弾き振りして話題を呼んだベートーヴェンのピアノ協奏曲全曲映像より第4番。いきなり独奏ピアノの柔らかな音で始まる手法、伴奏に徹しがちなオーケストラとピアノを対話させるようなアンサンブルなど、ベートーヴェンの進取の気風に満ちた音楽は、当時の聴衆に驚きと感動をもたらしたそうです。この頃、ベートーヴェンの難聴は進行しており、作曲家自身の独奏によるピアノ協奏曲の初演は、この曲が最後となりました。ベートーヴェンはブッフピンダーが長年、原典版研究に取り組んできた特別な作曲家で、演奏のところに研究の集大成ともいえる深い解釈がうかがえます。その誠実な人柄を表すような温かみのあるピアノと、ウィーン・フィルのまろやかな音色がひびりと一致した見事なコンビネーションは絶妙。美しく融け合ったハーモニーが極上の音響を誇るムジークフェラインで天上の音楽さながらに響き渡ります。</p> <p>[演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第4番ト長調Op.58 [ピアノ &amp; 指揮] ルドルフ・ブッフピンダー [演奏] ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2011年5月5日～8日 ムジークフェラインザール (ウィーン) [映像監督] カリーナ・フィビッヒ ■約38分</p>
ブッフピンダー & ウィーン・フィル『ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番』	5、5、 16、 16、 21、21	初演では独奏ピアノパートが空白のまま、ピアノ独奏者であるベートーヴェンが即興で乗り切ったというエピソードが有名。ブッフピンダーがウィーン・フィルを弾き振りする姿は、まるでベートーヴェンのよう。	<p>ウィーンで絶大な人気を誇る最も旬なピアニスト、ルドルフ・ブッフピンダーがウィーン・フィルを弾き振りして話題を呼んだベートーヴェンのピアノ協奏曲全曲映像より第3番。ベートーヴェンのピアノ協奏曲の中で唯一の短調で書かれた第3番は、1803年4月5日アン・デア・ウィーン劇場での初演（併せて交響曲第2番も初演）で、独奏ピアノパートが空白のまま、ピアノ独奏者のベートーヴェン自身が即興で乗り切ったというエピソードが有名です。19世紀、ベートーヴェンのピアノ協奏曲の中では最も愛され頻りに演奏された楽曲で、華麗なピアノの技巧的パッセージがみどころ。ベートーヴェンはブッフピンダーが長年、原典版研究に取り組んできた特別な作曲家で、演奏のところに研究の集大成ともいえる深い解釈がうかがえます。その誠実な人柄を表すような温かみのあるピアノと、ウィーン・フィルのまろやかな音色がひびりと一致した見事なコンビネーションは絶妙。美しく融け合ったハーモニーが極上の音響を誇るムジークフェラインで天上の音楽さながらに響き渡ります。</p> <p>[演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番ハ短調Op.37 [ピアノ &amp; 指揮] ルドルフ・ブッフピンダー [演奏] ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2011年5月5日～8日 ムジークフェラインザール (ウィーン) [映像監督] カリーナ・フィビッヒ ■約40分</p>
ブッフピンダー & ウィーン・フィル『ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第2番』	5、5、 16、 16、 21、21	その初演がベートーヴェンにとってウィーン・デビューとなったピアノ協奏曲第2番。ブッフピンダーがウィーン・フィルを弾き振りし、ムジークフェラインに響きわたる極上のアンサンブルが素晴らしい。	<p>ウィーンで絶大な人気を誇る最も旬なピアニスト、ルドルフ・ブッフピンダーがウィーン・フィルを弾き振りして話題を呼んだベートーヴェンのピアノ協奏曲全曲映像より第2番。ベートーヴェンにとって最初に作曲されたピアノ協奏曲で、その初演はベートーヴェンのウィーン・デビューとなりました。曲の規模や楽器編成は第1番よりも小さく、ハイドンやモーツァルトの影響も色濃く残っています。ベートーヴェンはブッフピンダーが長年、原典版研究に取り組んできた特別な作曲家で、演奏のところに研究の集大成ともいえる深い解釈がうかがえます。その誠実な人柄を表すような温かみのあるピアノと、ウィーン・フィルのまろやかな音色がひびりと一致した見事なコンビネーションは絶妙。美しく融け合ったハーモニーが極上の音響を誇るムジークフェラインで天上の音楽さながらに響き渡ります。</p> <p>[演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第2番変ロ長調Op.19 [ピアノ &amp; 指揮] ルドルフ・ブッフピンダー [演奏] ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2011年5月5日～8日 ムジークフェラインザール (ウィーン) [映像監督] カリーナ・フィビッヒ ■約33分</p>
ブッフピンダー & ウィーン・フィル『ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第1番』	5、5、 16、 16、 21、21	ベートーヴェンがウィーンに居を移して間もない頃の初期のピアノ協奏曲。ブッフピンダーがウィーン・フィルを弾き振りし、温かみのあるピアノとまろやかな音色のオーケストラの極上サウンドが必見。	<p>ウィーンで絶大な人気を誇る最も旬なピアニスト、ルドルフ・ブッフピンダーがウィーン・フィルを弾き振りして話題を呼んだベートーヴェンのピアノ協奏曲全曲映像より第1番。ハイドンの下で作曲を学ぶべく、故郷ボンからウィーンに居を移したベートーヴェンが、引越してまもない時期に書いたピアノ協奏曲。第2番の方が先に作曲されているのですが、この曲が先に出版されたことで第1番となっています。初演は作曲家自身が独奏したと言われています。ベートーヴェンはブッフピンダーが長年、原典版研究に取り組んできた特別な作曲家で、演奏のところに研究の集大成ともいえる深い解釈がうかがえます。その誠実な人柄を表すような温かみのあるピアノと、ウィーン・フィルのまろやかな音色がひびりと一致した見事なコンビネーションは絶妙。美しく融け合ったハーモニーが極上の音響を誇るムジークフェラインで天上の音楽さながらに響き渡ります。</p> <p>[演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第1番ハ長調Op.15 [ピアノ &amp; 指揮] ルドルフ・ブッフピンダー [演奏] ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 [収録] 2011年5月5日～8日 ムジークフェラインザール (ウィーン) [映像監督] カリーナ・フィビッヒ ■約41分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
パレンボイム&シューターツカベレ・ベルリン『ブルックナー：交響曲第8番』	3、3、 11、 11、 15、 15、 19、19	2010年6月20日～27日ベルリンのフィルハーモニーで行われたダニエル・パレンボイム指揮シューターツカベレ・ベルリンのブルックナー・チクルスより、6月25日に収録された交響曲第7番。	指揮者、ピアニストとしてマルチな才能を発揮するパレンボイムのデビュー60周年となったマエストロ熟練の指揮、そして編成を拡大し大音響を轟かせるオーケストラの迫力は、映像で見るとまさに圧巻。ブルックナーが苦手な人ほど見てほしい番組。  [演目]アントン・ブルックナー：交響曲第8番ハ短調WAB108（ハース版） [指揮]ダニエル・パレンボイム[演奏]シューターツカベレ・ベルリン [収録]2010年6月26日フィルハーモニー（ベルリン）[映像監督]アンドレアス・モレル■約1時間26分
パレンボイム&シューターツカベレ・ベルリン「ブラームス交響曲全集」Vol.2	3、3、 11、 11、 15、 15、 19、19	パレンボイムの故郷で、手兵シューターツカベレ・ベルリンとのブラームス交響曲第3番と第4番を披露。かつてないほど自在で濃密な演奏で会場の興奮を誘う。	2018年、アルゼンチンのブエノスアイレスで開催された「フェスティバル・パレンボイム」。同生まれのダニエル・パレンボイムが、長く音楽監督を務めるシューターツカベレ・ベルリンを率いて、オペラやコンサートを上演。そこでブラームスの4つの交響曲全てが演奏され、現地の聴衆の興奮を誘いました。彼らはその前年に満を持して全4曲の録音を行ったばかりで、到達した境地を故郷に知らしめるステージにもなったのです。 第3番、第4番の公演は、前2曲以上に指揮者パレンボイムのカリスマ性が際立ったと言えるかもしれません。やはり遅めのテンポを基本としながら、ときにワイルドなほどに強烈な音を要求、どの瞬間にも熱気が満ちています。重厚ではあるけど鈍重にはならず、追いつめ場面の切迫感もすさまじく、アゴークの細かい付け方とその反応ぶり、むしろ機敏なものとも言えます。 この日の公演にはベルリン・フィルの名ホルン奏者ステファン・ドールも加わっています。第3番は作品のもつ激しいパッションが前面に出ながら、美しい旋律の魅力もたっぷり味わえます。枯淡の境地ととらえられることのある第4番も、パレンボイムにかかれれば渋い中にもカローリ-満点な音楽になり、テンポの変化、強弱のメリハリに富んだ演奏を楽しめます。しかも、オーケストラの音色の美しさはほれほれするもので、どのセクションもすばらしいですが、特にヴィオラ、チェロの艶は印象的。容赦なく追いつめ込んだ終結で興奮を誘ったパレンボイムは、花束をもって満場の聴衆に応えるのです。 [演目]ヨハネス・ブラームス：交響曲第3番 へ長調Op.90,ヨハネス・ブラームス：交響曲第4番 ホ短調Op.98 [指揮]ダニエル・パレンボイム [演奏]シューターツカベレ・ベルリン
パレンボイム&シューターツカベレ・ベルリン「ブラームス交響曲全集」Vol.1	3、3、 11、 11、 15、 15、 19、19	パレンボイムが手兵シューターツカベレ・ベルリンと共に故郷に凱旋。ブラームス交響曲第2番と第1番の重厚かつ濃密な演奏で、満場の聴衆のボルテージを上げる。	2018年、アルゼンチンのブエノスアイレスで開催された「フェスティバル・パレンボイム」。同生まれのダニエル・パレンボイムが、長く音楽監督を務めるシューターツカベレ・ベルリンを率いて、オペラやコンサートを上演。そこでブラームスの4つの交響曲全てが演奏され、現地の聴衆の興奮を誘いました。彼らはその前年に満を持して全4曲の録音を行ったばかりで、到達した境地を故郷に知らしめるステージにもなったのです。 最初の公演は、第2番、第1番の順番。いずれもパレンボイムらしさが発揮された演奏で、遅めのテンポを基本に、すべての音に熱気を込めて音を鳴らしきり、濃厚、濃密、重厚といった言葉が次々に浮かんでくるようなパフォーマンスです。ブラームス作品のもつロマン性を最大限に拡大し、1小節たりとも同じ表現はしないという気迫に満ちています。特にこの第2番、第1番では、ロマン性という枠に収まらず、あたかもマーラーのような変化に富んだ巨大な世界まであらわそうとしているかのようです。 第2番では穏やかな曲想からも劇的な流れを引き出し、オーケストラの豊潤な音色の魅力もあって、聴きごたえ十分。最後の伸ばしの音に入る直前、一瞬の間になんと「bravo!」の掛け声が入って、そのまま拍手が始まってしまいます。ブエノスアイレスの聴衆のおおらかさと言うべきか、なんと珍しい光景もライブならではの。もとより劇的な第1番はますます濃厚で激しく、かつ壮大な音楽を作り上げて、今度は最後まで拍手を待ってから、満場の聴衆のスタンディングオベーションが巻き起こります。 [演目]ヨハネス・ブラームス：交響曲第2番 二長調Op.73,ヨハネス・ブラームス：交響曲第1番 八短調Op.68 [指揮]ダニエル・パレンボイム [演奏]シューターツカベレ・ベルリン [収録]2018年7月 キルヒナー文化センター（ブエノスアイレス） [映像監督]ティロ・クラウゼ■約1時間35分
バーンスタインのシューマン『交響曲第2番』	2、2、 11、 11、 14、 14、 17、17	シューマン交響曲の中で最も美しい楽章と称され、バーンスタイン自身「ピアノシモの一大悲劇」と呼んだ第3楽章など、見どころ聴きどころも満載。	シューマンの4曲ある交響曲で実質3番目にあたる第2番は、作曲家が次第に精神障害に悩まされていく中で完成されたと言われています。第2楽章は演奏者にとって最高難度のテクニクとアンサンブル能力が必要とされ、オーケストラ入団オーディションの課題曲によく使われるそうです。 この番組は、1980年代中盤に行われたレナード・バーンスタイン指揮ウィーン・フィルのシューマン・チクルスの『交響曲第2番』ライブ映像。この楽曲を最初に知るには最適の内容であり、オーケストラを映像で見ると楽しさにあふれた、まさに20世紀を代表する定番映像です。 バーンスタインの身体全体で指揮する姿や顔の表情、4管編成のウィーン・フィルと当時のメンバーなど、映像ならではのさまざまな楽しみ方が可能。ウィーン・フィルのスーパーアンサンブルが堪能できる第2楽章、シューマン交響曲の中で最も美しい楽章と称され、バーンスタイン自身「ピアノシモの一大悲劇」と呼んだ第3楽章など、見どころ聴きどころも満載です。  [演目]ロベルト・アレクサンダー・シューマン：交響曲第2番ハ長調Op.61[指揮]レナード・バーンスタイン[演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団[収録]1985年10月23日～11月6日ムジークフェラインザール（ウィーン）[映像監督]ハンフリー・バートン■約48分

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ネルソンス&ベルリン・フィル「ワーグナーとブルックナー」	6、6、 10、 10、 14、 14、 18、 18、 22、22	ワーグナー最後の演目と、ワーグナーに捧げられたブルックナー作品で、ネルソンスがベルリン・フィルから緻密で穏やかな美演を引き出す。	<p>ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管とボストン響という、欧米の名門中の名門楽団で現在シェフを務めるアンドリス・ネルソンス。ウィーン・フィルとはベートーヴェンを録音するなど、世界中のあらゆるトップ楽団と良好な関係を保っていて、ベルリン・フィルとも客演を重ねて注目の演奏を連続しています。2016年4月のベルリン・フィル定期演奏会では、ネルソンスが特に愛しているというワーグナーと、ゲヴァントハウス管でも録音を進めているブルックナーを取り上げます。</p> <p>ワーグナーは『バルジファル』から第1幕の前奏曲と第3幕の「聖金曜日の音楽」を。もとより作曲家最後の奥義のような、深く神秘的な音楽に満ちた作品ですが、ネルソンスは繊細な手の動きでベルリン・フィルを操り、持ち前の深い音色を生かしながら、緻密で美しい演奏を引き出しています。演奏の表情は静かで穏やか、音楽の頂点でも激することなく余裕をもって鳴らす様は、すでにマエストロの貫禄も十分と言えますよ。</p> <p>後半はブルックナー交響曲第3番の1889年版（第3稿）を。ワーグナーに献呈されたことでも知られる本作は、巨匠への尊敬の念があちこちに感じられ、ワーグナー自身は出だしのトランペット・ソロを殊に気に入っていたというエピソードも残されています。ネルソンスは前半と同様のスタンスで、ベルリン・フィルらしい重厚な音色とパワーは引き出しつつ、抑制の効いたバランスの音響とホールに残響を生かした、懐の深い演奏を構築していきます。しなやかさと繊細さを備えたブルックナーの世界に浸れる時間になるでしょう。</p> <p>【演目】リヒャルト・ワーグナー：3幕の舞台神聖祝典劇『バルジファル』より第1幕の前奏曲、第3幕より「聖金曜日の音楽」、アントン・ブルックナー：交響曲第3番二短調 WAB.103（1889年版（第3稿））【指揮】アンドリス・ネルソンス【演奏】ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 【収録】2016年4月29日フィルハーモニー（ベルリン）【映像監督】ミハエル・ペイヤー ■字幕／約1時間36分</p>
ネルソンス&コンサートヘボウ「バルトークとショスタコーヴィチ」	6、6、 10、 10、 14、 14、 18、 18、 22、22	アムステルダムコンサートホール「コンサートヘボウ」専属オーケストラとして1888年に発足したオランダの名門ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団。世界屈指の音響を誇るホールが作るピロートの弦、ふくよかな木管、黄金の金管という独特なサウンドを“目で聴く”番組。	<p>若きバルトークが恋焦がれた女性ヴァイオリニストに献呈され、彼女の死後に発見されるまで半世紀にわたり存在を知られなかったロマンティックな『ヴァイオリン協奏曲第1番』、第二次世界大戦時のショスタコーヴィチのファシズムへの勝利宣言とされ、第1楽章の12回繰り返される「戦争の主題」が有名な交響曲第7番『レニングラード』、その間にシベリウス11歳の作品『水滴』というプログラムは全体の流れに見事なコントラストと調和を生み出し、番組の最後まで一瞬たりとも目が離せません。</p> <p>1978年ラトヴィア生まれの若きアンドリス・ネルソンスは、ボストン交響楽団音楽監督と、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の楽長（カベルマイスター）を兼任。コンサートヘボウ管とは現在「ショスタコーヴィチ交響曲全集」が進行中。この番組では、『レニングラード』の圧倒的迫力と冷静さを保ちながら観客を興奮に導く若き巨匠の大きな指揮が見どころ。</p> <p>バルトークを弾くのは、2016年ノーベル賞コンサートでも見事なブラムスを披露したオランダの女流ヴァイオリニスト、ジャニーヌ・ヤンセン。その官能的なヴァイオリンは音だけでなく、彼女の顔の表情や動きなど、是非目で音楽を追って欲しい。</p> <p>【演目】バルトーク・ペラ：ヴァイオリン協奏曲第1番Sz.36、ジャン・シベリウス：水滴JS.216、ドミートリイ・ショスタコーヴィチ：交響曲第7番八長調Op.60『レニングラード』【指揮】アンドリス・ネルソンス【演奏】ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、ジャニーヌ・ヤンセン（ヴァイオリン）クレゴール・ホルシュ（チェロ）【収録】2015年9月17日コンサートヘボウ（アムステルダム）【映像監督】ヨースト・ホンセラー ■約1時間54分</p>
ドゥダメル&ベルリン・フィル2018「バーンスタイン&マーラー」	1、1、 7、7、 12、 12、 17、 17、 25、25	ベルリン・フィルとも相性抜群の21世紀のライジング・スター、ドゥダメルによる、秀逸なバーンスタイン・プログラムが、人びとに生きる勇気を与えてくれる。	<p>21世紀の指揮者界で最も注目を集めるライジング・スターの筆頭が、1981年生まれのカスタボ・ドゥダメルであるのは間違いありません。その彼が、2018年10月にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の定期演奏会でレナード・バーンスタインとグスタフ・マーラーを指揮した映像をお届けします。</p> <p>ドゥダメルのベルリン・フィル・デビューは2008年6月。ヴァルトビューネの野外コンサートでのスペイン音楽とラテン・アメリカ音楽によるプログラムでした。その翌年にはフィルハーモニーでの定期演奏会にも登場（セルゲイ・プロコフィエフの交響曲第5番他のロシア・プロ）。その後も頻繁に共演を繰り返し、いまではベルリン・フィルが最も共感を寄せる指揮者の一人となっています。</p> <p>当番組のコンサートが行なわれた2018年は、バーンスタインの生誕100年のメモリアル・イヤーでした。バーンスタインが亡くなった1990年にまだ9歳だったドゥダメルには、バーンスタインとの直接の接点はないわけですが、ドゥダメルの名前を、クラシック・ファン域を超えて広く有名にしたのは、シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラを指揮した『ウエスト・サイド物語からのシンフォニック・ダンス』の映像でした。会場全体を興奮の渦に巻き込んだその圧倒的な熱演は、バーンスタインへの強いシンパシーを感じさせるものにも十分なものでした。</p> <p>ここでも、じつに秀逸なバーンスタイン・メモリアル・プログラムを披露しています。</p> <p>バーンスタインの『管弦楽のためのディヴェルティメント』は、ボストン交響楽団の創立100周年を記念して、同楽団の委嘱により作曲された作品です。1980年9月、ボストン交響楽団のシーズン・オープニング・コンサートにおいて、小澤征爾の指揮で初演されました。Boston（ボストン）のB（ロ音）とCentennial（100周年）C（ハ音）の音型が使われた全8楽章は、楽章ごとにさまざまなダンスの要素で構成されており、最後は華やかな行進曲「ポントン響よ、永遠なれ」で幕を閉じます。</p> <p>一方、指揮者としてのバーンスタインが最も得意としていたのがマーラーの交響曲でした。つまりこのプログラムは「作曲家バーンスタイン」と「指揮者バーンスタイン」の双方に光を当てた、メモリアル・イヤーにふさわしい選曲なのです。ちなみにドゥダメルはこの翌月にもベルリン・フィルの指揮台に登場して、バーンスタイン作曲の交響曲第1番『エレミア』と、やはり指揮者バーンスタインが名盤を残しているドミートリイ・ショスタコーヴィチの交響曲第5番という、同趣向のバーンスタイン・プログラムを指揮しています。</p> <p>トランペットの葬送ファンファーレから始まるマーラーの交響曲第5番には、しばしば死の影がつかまってくるのが指摘されますが、ドゥダメルとベルリン・フィルのこのうえなく美しい弦楽器群の第4楽章アダージェットや、その後に続く力強いフィナーレが、私たちに勇気を与えてくれる気がします。</p> <p>【曲目】レナード・バーンスタイン：管弦楽のためのディヴェルティメント、グスタフ・マーラー：交響曲第5番嬰ハ短調 【演奏】カスタボ・ドゥダメル（指揮）／ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団【収録】2018年10月27日、ベルリン・フィルハーモニー</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ドゥダメル & ウィーン・フィル2018「アイヴスとチャイコフスキー」	1、1、 7、7、 12、 12、 17、 17、 25、25	2018年2月のウィーン・フィル定期、関係の深まるドゥダメルの指揮で、アイヴスの交響曲第2番がムジークフェラインに響きわたる！	<p>ウィーン・フィルが本拠地ムジークフェラインで行った2018年2月の定期演奏会。指揮者は2017年ニューイヤー・コンサートにも登場したグスターボ・ドゥダメル。オーケストラは、ヴァイオリンが両翼に分かれ、コントラバスは奥の壁に横一列に並ぶというニューイヤーに近い配置を採用。この番組は、チャイコフスキーの名作、交響曲第4番がメインですが、前半は何とアイヴスの交響曲第2番！</p> <p>アイヴスは近代アメリカの作曲家で、作曲を学びながらも本職は保険会社の役員ということもあり、まったく独自の音楽観を確立しました。1901年完成の第2交響曲は彼の代表的な大作のひとつで、西欧の古典的な音楽形式と、アメリカの民謡やフォスターの楽しいメロディの断片が交錯する、全5楽章のユニークな傑作です。第1楽章の対位法による旋律を歌うしなやかな弦をはじめ、第3楽章やフィナーレの詩情豊かな美しさは溜め息もの。一方、楽しい場面ではオーケストラの一生懸命さが何とも微笑ましく、ウィーンの間がアメリカ民謡を吹きまくる場面も思わずニヤリ。フィナーレのチェロ・ソロ（タマーシュ・ヴァルガのすばらしい名奏！）の場面はドヴォルザークのような懐かしさ。ドゥダメルは本作を暗譜で振り、オケを巧みに操り、ときに煽りながら、ウィーン・フィルによる美しく楽しい、痛快なアイヴス演奏を作りあげました。フィナーレの最後は、一気呵成に猛進し、結尾の「オチ」を一瞬で通り過ぎるので、本作を初めて聴く方は最後の最後までお聴き逃しなさい！</p> <p>後半のチャイコフスキーの第4番もドゥダメルは暗譜で臨み、激することなく落ち着き気味に指揮していますが、こちらはオケも勝手知ったる曲であり、その情熱や歌心を存分に表現した好演が実現。ウィーン・フィルとドゥダメルの良好なコンビネーションが見て取れる、充実の公演になりました。</p> <p>[演目]チャールズ・アイヴス：交響曲第2番、ビョートル・イリイチ・チャイコフスキー：交響曲第4番へ短調Op.36[指揮]グスターボ・ドゥダメル[演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団[収録]2018年2月17日&amp;18日ムジークフェラインザール（ウィーン）[映像監督]ディック・カイス</p>
ティエレマン&シュターツカペレ・ドレスデン『ブルックナー：交響曲第3番』	23、 23、 26、 26、 28、28	しなやかな弦、深く柔らかな管、類まれな緊張感が生んだ緻密で濃厚なドイツ音楽の真髄！じっくり時間をかけて進行中のブルックナー全曲チクルス。	<p>クリスティアン・ティエレマン（1959年生まれ）が、2012年から首席指揮者を務めるシュターツカペレ・ドレスデンとともに、じっくりと継続中のブルックナー交響曲チクルスから、2016年9月の第3番のライブ映像です。</p> <p>ティエレマンは、コレベートルからスタートし、オペラ・ハウスで下積みを経て世界の権舞台上に躍り出た、ベルリン生まれの生粋のドイツ人指揮者。オペラでもコンサートでも、その主要なレパートリーは、やはりドイツ音楽が中心で、ドイツの正統派を継承する指揮者としての評価を揺るぎないものになっています。特にブルックナーには愛着を持って取り組んでおり、かつて、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督就任披露コンサートの演目を選んだのがブルックナーでしたし（2004年／交響曲第5番）、シュターツカペレ・ドレスデンの首席指揮者就任記念コンサートで指揮したのもブルックナーでした（2012年／交響曲第7番）。そもそも、シュターツカペレ・ドレスデンとの契約のきっかけになったのが、2009年に前任の首席指揮者フビオ・オリヰージの代役で指揮したブルックナーの交響曲第8番だったのです。ティエレマンにとって、節目を飾るコンサートで取り上げる大切な作曲家です。</p> <p>アントン・ブルックナー（1824～1896年）の交響曲第3番二短調は1873年に初稿が完成しました。その際、敬愛するリヒャルト・ワーグナーをバイロイトに訪ねて前作第2番とともに第3番の総譜を見せ、どちらか1曲を献呈したいと申し出たところ、ワーグナーが第3番を選んだという逸話が伝えられています。そのゆえ「ワーグナー」というニックネーム付きで呼ばれることもあります。しかしこの初稿版は「演奏不能」という理由でウィーン・フィルから初演を拒否されてしまったため、ブルックナーは大幅な改訂を余儀なくされ、1877年に完成した第2稿を、今度は自らウィーン・フィルを指揮して、ようやく初演にこぎつけました。さらにブルックナーは1888～89年にも改訂を行ない、第3稿として完成させました。ティエレマンは1877年の第2稿を用いています。</p> <p>シュターツカペレ・ドレスデンはドレスデン国立歌劇場（ゼンパー・オーパー）の専属オーケストラ。1548年に創設されたザクセン選帝侯の宮廷楽団を前身とする世界最古級のオーケストラです。その世界屈指の美しいトーンと、ティエレマンの緻密な音楽作りは実に相性がよく、ここでも、類まれな緊張感を持つ、濃厚なブルックナーを生み出しています。</p> <p>[演目]アントン・ブルックナー：交響曲第3番二短調WAB.103（1877年第2稿）[指揮]クリスティアン・ティエレマン[演奏]シュターツカペレ・ドレスデン[収録]2016年9月2日&amp;3日フィルハーモニー（ザクセン）[映像監督]ティエレマン、ミルツナー</p>
ザルツブルク音楽祭2020「メッツマハー & コパチンスカヤ」	23、 23、 25、 25、 27、27	オリジナル企画で独奏、指揮、編曲。そして「声」まで！ コロナ禍の2020年ザルツブルク音楽祭で強烈な魅力を放った奇才コパチンスカヤの世界。	<p>コロナ禍のなか、当初の予定から大幅に規模を縮小して開催された創設100周年記念の2020年ザルツブルク音楽祭。準備期間中にスタッフの感染が報じられましたが、それ以外には出演者・観客を含めて感染者の報告もなく、8月1日から30日までの全日程を無事に終了しました。</p> <p>音楽祭中盤の8月13日にモーツァルトのための劇場（旧祝祭小劇場）に登場したのは、現在最も注目を集めるヴァイオリニストであるパトリツィア・コパチンスカヤ。裸足のコパチンスカヤがいつものように、知的ながらも野生的な直感と靈感に満ちた演奏で客席を魅了しました。彼女の魅力全開のコンサートの模様をお届けします。現代曲中心のプログラムを、終始嬉々として弾いている姿を見ているだけでも楽しい映像。肩が破れ、しつけ糸が付いたままのようなモノトーンの個性的なパンツ・スーツも、彼女が放つフミティヴなパワーとぴったり一致するイメージです。</p> <p>コンサート前半はジェルジ・リゲティ（1923～2006）のヴァイオリン協奏曲（1990/1992改訂）。コパチンスカヤが得意とするレパートリーで、2010年に来日した際に新日本フィルと弾いたのを記憶の方も少なくないでしょう。スリリングな響きで一気に聴き通してしまう、エッジの効いた20世紀の名曲です。中世や民族歌謡の音楽素材も引用されているという音楽は、無調ですが旋律的で、オーケストラ奏者がオカリナやスライド・ホッソルを吹く姿もユニークです。終楽章にはカデンツァが指定され、初演者のサミュエル・ガヴリロフや、英国の作曲家トーマス・アデスの書いたヴァージョンがあるのですが、コパチンスカヤが弾いているのはどうやら自作。なんと「声」まで使ったオリジナルなカデンツァです。そのカデンツァ終わりから曲尾まで、客席から思わず笑い声も起きる彼女のふるまいも痛快です。</p> <p>そしてコンサート後半は、彼女らしい才気あふれる、「コパチンスカヤ版」の『死と乙女』です。コパチンスカヤ自ら弦楽合奏用に編曲したシューベルトの弦楽四重奏曲第14番『死と乙女』を、楽章ごとに一度解体して、中世から現代のジェルジ・クルターグまで、「死」をテーマとする作品を挿入して再構成した、彼女のオリジナル企画。同じコンセプトのCDが2017年のグラミー賞を受賞しています（フランスAlphaレーベル。挿入曲が一部異なります）。</p> <p>時節柄、「死」をテーマにすることをナーヴァスな反応もあったかもしれませんが、しかし死が身近な現実があるからこそ、それと向き合うことであらためて、生への活力や生まれてきたことへの感謝を実感するという意味でもあるでしょう。コパチンスカヤの演奏は、安易な慰めや鎮魂ではない、ギラギラするような生のエネルギーにあふれています。</p> <p>再創造された『死と乙女』ですが、まるで最初からこういう作品であったかのように自然です。挿入された作品が時代を超えてシューベルトと調和しているのは、前曲のリゲティとどこか共通しています。1曲ごとに、画面の向こうにくいくいと引き込まれていく凄演です。</p> <p>原曲の第2楽章の前には、シューベルト自身が引用した自作の歌曲『死と乙女』を、コパチンスカヤが歌っています。前半の「乙女」の部分はシュプレヒスティエンメのように音程を外して、後半の「死」の部分で音をつけて歌い始める彼女。詩の最後の「私の腕の中で眠れ」のささやきには鳥肌が立ちます。</p> <p>第3楽章と第4楽章の間には、リゲティと同じハンガリーの作曲家（ルーマニア生まれ）のジェルジ・クルターグ（1926～）の作品が2曲挟まれています。『リガトゥーラ～フランシス＝マリーへのメッセージ（答えのない質問への答え）』（1989）は、アメリカのチェロ奏者フランシス＝マリー・ウイッティのために書かれた作品。ウイッティは1970年代から弓を2</p>



番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ザルツブルク音楽祭2020「ネルソンス & ウィーン・フィル」	6、6、 10、 10、 14、 14、 18、 18、 22、22	現在ウィーン・フィルが最も信頼を置く指揮者筆頭のネルソンスが、コロナ禍のザルツブルク祝祭劇場に詰めかけたファンと紡ぎ上げた、緊張感みなぎるマーラー『悲劇的』	<p>記念すべき創立100周年を新型コロナウイルス流行の脅威のなかで迎えた2020年のザルツブルク音楽祭。番組では、アンドリス・ネルソンスがウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮したマーラーの交響曲第6番『悲劇的』のコンサート映像をお届けします。</p> <p>音楽祭のホスト役であるウィーン・フィル。ネルソンスとの最近の蜜月ぶりを見れば、100周年のパートナーとして彼が登場するのは必然のように思えます。ネルソンスとウィーン・フィルは、ベートーヴェン生誕250周年に合わせてドイツグラモフォンからベートーヴェンの交響曲全集をリリース。日本のレコード・アカデミー賞の大賞銅賞を獲得するなど高い評価を得ました。2020年のニューイヤー・コンサートを指揮したのもネルソンスです。ネルソンスは、現在ポストン交響楽団音楽監督とライプツヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のカベルマイスターを兼任するラトヴィア出身の42歳。現代の指揮者界を牽引する第一グループの一人です。両者のマーラーは、2018年のザルツブルク音楽祭での第2番『復活』以来2度目の演奏でした。ちなみにネルソンスは、2015年のザルツブルク音楽祭でも、ポストン交響楽団と第6番を演奏しています。</p> <p>マーラーの交響曲第6番は1903年から1904年にかけて作曲され、1906年5月にドイツのエッセンで、マーラー自身の指揮により初演されました。『悲劇的』という副題は、翌1907年1月にマーラーが指揮したウィーン初演のプログラムに初めて掲載されています。マーラーの命名かどうかは不明ですが、自身が指揮した公演ですから、少なくとも承認はしていたのではないかと考えられています。しかしそれは、同時期に作曲した歌曲集『亡き子をしのぶ歌』とともに、マーラーの実人生の悲劇を暗示することになってしまいます。1897年に37歳でウィーン宮廷歌劇場の芸術監督に就任したマーラーは、1902年にアルマと結婚、すぐに長女マリア・アンナが、2年後には次女アンナが生まれ、公私ともに絶頂期を迎えていました。ところが1907年の夏に長女マリア・アンナが病気で夭折。自身も心臓病と診断され、さらには悪化していた宮廷歌劇場との関係が表面化し、秋には辞任を余儀なくされてしまうのです。第1楽章冒頭を「死の行進曲」とたとえたのはバーンスタインですが、聴き手はそこに、マーラー自身の暗い宿命を嗅ぎ取らざるを得ません。</p> <p>なお近年、この作品の第2楽章と第3楽章の演奏順について解釈が分かれており、国際マーラー協会では「第2楽章アンダンテー 第3楽章スケルツォ」という見解を支持していますが、ここでは初稿どおり、「第2楽章スケルツォー 第3楽章アンダンテ」の順で演奏しています。また、この曲の見どころである巨大なハンマーによる「運命の打撃」は、（「3回」ではなく）一般的な通例に沿って「2回」振り下ろされます。</p> <p>そのハンマーの使用による視覚的な演出効果などもある作品ですが、ネルソンスはけっしてそれをこけおど的に誇張したりせず、クールかつ丁寧に音楽をキープ。それでいてかたときも情感を失うことのない音楽作りで聴き手を魅了します。断末魔の叫びのような金管の最後の和音がティンパニの連打とともに消えて曲を結んだあの長い静寂。客席も一体となった緊張感が伝わる、素敵なコンサート映像です。</p> <p>【演奏】 アンドリス・ネルソンス（指揮） ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 【曲目】 グスタフ・マーラー：交響曲第6番イ短調『悲劇的』</p>
ザルツブルク音楽祭2020「ドゥダメル & ウィーン・フィル」キーンシンを迎えて	1、1、 7、7、 12、 12、 17、 17、 25、25	目下飛ぶ鳥を落とす勢いのライジング・スター、ドゥダメルが、ウィーン・フィルとの相性の良さであらためて見せつけた『火の鳥』に大喝采！	<p>新型コロナウイルス感染症の流行のため、一時は開催が危ぶまれた創立100周年のザルツブルク音楽祭。予定より規模を縮小して8月1日から30日まで行われた音楽祭の最終盤、祝祭大劇場で行われたグスターボ・ドゥダメルとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートの模様をお届けします。前半にエフゲニー・キーンシンを独奏に迎えてフランツ・リストのピアノ協奏曲第1番、後半がイーゴリ・ストラヴィンスキーの『火の鳥』というプログラム。聴衆同士の感染リスクを避けるために、休憩なしで行われた公演でした。</p> <p>歴史を辿れば、100年前も逆境のなかでのスタートでした。第一次世界大戦でのオーストリアの敗戦、そして戦争末期に世界を覆った「スペインかぜ」の脅威のなかで始まったザルツブルク音楽祭。はからずも再びパンデミックに見舞われたなかでの音楽祭開催には国内でも賛否両論があったはずですが、彼らの決断には、この音楽祭のDNAに潜在的に組み込まれているであろう、困難に立ち向かう勇氣やしたたかさも感じます。準備期間中にスタッフ一人の感染が報じられましたが、それ以外に一人の感染者も出さなかったことは、感染防止対策という点で、ひとまずは大成功だったと言ってもよいでしょう。</p> <p>「スペインかぜ」は音楽界にもさまざまな影響を与えました。当然ながら音楽家のなかにもたくさん感染者が出ており、『火の鳥』の作曲家ストラヴィンスキーもその一人です。1918年、大戦とロシア革命の混乱で経済的な苦境にあったストラヴィンスキーは、奏者7人という小編成で演奏できる『兵士の物語』で各地を巡業して収入を得ようと目論んでいました。しかし初演後に自らが感染してしまい、また巡業の関係者も次々に感染したために計画は中止となってしまったのです。成功作である『火の鳥』の編成を縮小して1919年版組曲を作ったのも、そんな、金銭的にも人的にも疲弊したヨーロッパ楽壇の事情を鑑みて、どの楽団でも演奏しやすい版にすることで収入を得るためという説もあります。</p> <p>しかし2020年のコロナ禍のザルツブルクでドゥダメルとウィーン・フィルが演奏した『火の鳥』は、1910年初演の全曲版。このあと、11月の来日公演でも披露してくれたのと同様、堂々たる4管編成。演奏風景だけを見ればコロナ前の日常と変わりません。</p> <p>ドゥダメルが初めてウィーン・フィルを指揮したのは26歳のとき。2007年のルツェルン音楽祭でした。ザルツブルク音楽祭には、2008年のシモン・ボリバル・ユース・オーケストラとの初出演を経て、翌2009年にウィーン・フィルとのコンビで再登場。ストラヴィンスキーの『春の祭典』を指揮しています。さらにその翌年にはウィーンでの定期演奏会を初指揮。以降、2014年の日本公演や、2017年のニューイヤー・コンサートなど、両者の蜜月ぶりは際立っています。</p> <p>デビュー当時の、シモン・ボリバルを指揮した演奏からは、切れのよいアグレッシブな指揮者という印象もあるかもしれませんが、ここで見るドゥダメルの指揮は、とても丁寧かつ明瞭であることがわかります。パト・テクニクの面だけでなく、非常に見通しのよい設計で音楽を運んでいるのです。だからこそ、でしょう。ウィーン・フィルがじつに気持ちよさそうに弾いています。両者のコラボから、今後もしばらく目が離せません。</p> <p>一方、プログラム前半のキーンシンは貫禄十分。2021年には50歳を迎えるキーンシン。颯爽としたクールなテクニクに深みが加わった弾きっぷりで、鮮やかに劇的なリストを聴かせています。ソリスト・アンコールの『小犬のワルツ』も安定の軽やかさ。画面越しに思わず口笛を鳴らしたくなる快演です。</p> <p>【演奏】 エフゲニー・キーンシン（ピアノ） グスターボ・ドゥダメル（指揮） ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ザルツブルク音楽祭2020「アラルコン&ヨンチェヴァ」	23、 23、 26、 26、 28、28	音楽の力が胸を熱くする、しなやかで強いヨンチェヴァの歌。コロナ禍のザルツブルク音楽祭で、時を超えて聴衆を虜にする、17世紀バロックからのメッセージ。	<p>音楽が生きてエネルギーを与えてくれる。それをまざまざと実感させてくれるような、ソニア・ヨンチェヴァのソプラノ・リサイタルをご覧ください。2020年の夏、コロナ禍のなかで開催された創設100周年のザルツブルク音楽祭でのライブ収録映像です。</p> <p>ソニア・ヨンチェヴァは、1981年12月25日ブルガリア生まれ。現在最もまばゆい輝きを放つソプラノ歌手の筆頭格です。ブラジド・ドミンゴ主宰の「オペラリア」コンクールで優勝したのが2010年。2013年パリ・オペラ座の『ランメルモールのルチア』で注目を浴び、2014年にロンドンやウィーンで『ファウスト』のマルグリートを歌って大きな成功を収めて、その評価を世界的なものにしました。美しい声と舞台での類まれな存在感で、バロックからモーツァルト、ベルカント・オペラ、ヴェルディ、プッチーニまで広く活躍しています。</p> <p>そのヨンチェヴァがザルツブルクで歌ったのはバロック・プログラム。彼女は古楽の雄ウィリアム・クリスティが主宰する若い声楽家のためのアカデミー「声の庭 (Le Jardin des Voix)」の出身ですから、バロックのレパートリーはもともとの本丸とも言えます。</p> <p>リサイタルは、オペラが誕生してまもない17世紀前半の初期バロックの作品を中心にしながらも、その時代を俯瞰するように、イギリスのルネサンス期の作品やパーセルのオペラ、さらにはイタリアとスペインとの交流も紹介する、17世紀のヨーロッパの旅のような多彩なプログラムになっています。</p> <p>対位法が高度に発達して技巧に偏りすぎたルネサンス盛期の反動もあって、詩の感情をダイレクトに表出することに重点が置かれた初期バロックのアリアの数々を、しなやかな、しかし強い芯のある声で歌うヨンチェヴァ。とても豊かな、聴く者の胸を熱くする力を持った、魂の歌です。</p> <p>しかしこの日、最も盛大な喝采を浴びていたのは、彼女の祖国ブルガリアの民謡「色あせた子羊」です。弦楽器のドローンだけのミニマムな伴奏の上で切々と歌われるのは、土俗的な信仰の神々の存在を感じさせるような哀愁を帯びた旋律。ひしひしと迫ってくる説得力のある歌に、画面の前で思わず居住まいを正してしまいます。ヨンチェヴァ自身も入り込んで歌っていたのでしょう、歌い終えると感極まって涙ぐんでしまいます。客席から、飛沫防止で禁止されているはずのブラボーが盛んに飛び出すのもやむを得ないかもしれません。歌の魂は20世紀にも脈々と受け継がれています。ベネズエラのシンガー、シモン・ディアスや、さらにはアンコールではABBAまで、400年を超えてつながる時空旅行をたっぷりお楽しみください。</p> <p>オーケストラは、アルゼンチン出身の古楽指揮者レオナルド・ガルシア・アラルコンが率いるカバラ・メディテラネア。ヨンチェヴァとは17年来的仲間というアラルコン。伴奏だけでなく、初期オペラの時代のリトルネットと同じような役割で、歌と歌の間をじっくりいきいきとした器楽合奏をつないで、コンサートを鮮やかに盛り上げています。</p> <p>アンコールで、ヨンチェヴァが「アラルコンが5日で作曲した」と説明しているナンバーについて少し補足しておきましょう。17世紀のウィーンで活躍したイタリア生まれのオペラ作曲家アントニオ・ドラーギ（1634? 35?～1700）の作品の多くは、今日忘れられています。ギリシャ神話のプロメテウスを題材とするスペイン語の歌劇『エル・プロメテオ（プロメテウス）』（1669）もそのひとつで、初演された1669年以降の上演の記録は残っていません。2018年にアラルコンは、それをフランスのディジョン・オペラで蘇演するために、楽譜が失われていた第3幕を補筆して完成させたのです。アラルコン自身はオペラ全曲盤CDのインタビューで、必ずしも17世紀的な書法には従っておらず、この最終場面のアリアではモーツァルトの</p>
ゲルギエフ&ミュンヘン・フィル2020「ベートーヴェン：交響曲第7番」	20、 20、 22、 22、 24、 24、 28、28	2020年の新様式で行われた、ゲルギエフ&ミュンヘン・フィル公演。彼の古典的な演目を観られる貴重な機会で、端正で格調高く、かつ愉快あふれる演奏会を。	<p>2020年の新型コロナウイルスの影響によるさまざまな制限のもとで行われた、ドイツの名門楽団ミュンヘン・フィルの9月公演。「新様式」による舞台配置で、弦楽器も1人ずつ譜面台を使い、各人が距離を取り、管楽器はより大きく離れています。この日は第1ヴァイオリン7人という小編成ですが、そうとは思えないくらい迫力ある響きで、さすがミュンヘン・フィルという重厚な演奏を実現しています。この配置でも音楽のスケールは大きく、最高の演奏という意志と、楽団の伝統が感じられます。</p> <p>この日に選ばれた演目は、ウィーンで活躍した3作曲家の名作。ゲルギエフが古典的な作品を振るのを観られる機会は稀少で、その意味でも貴重な記録うえ、大曲のときは違う表情と細やかな実力をしっかり体験できる映像になっています。最初は、ウィーンで大人気を誇ったイタリアのロッシーニの『チェネレントラ』序曲。長年オペラ劇場のトップを張るゲルギエフだけに、輝きある端正な響きで、胸躍る愉快も表現、オケの細かい技量も光る見事なロッシーニです。続いてミュンヘン・フィル首席ホルン奏者、チリ出身のマティアス・ピニエラのソロで、モーツァルトのホルン協奏曲第4番を。楽々と美音を奏でるソロの演技はもちろんのこと、ゲルギエフのモーツァルトのすばらしさも特筆ものであり、音楽的で美しい聴きものとなっています。</p> <p>最後はベートーヴェンの交響曲第7番。リズムとエネルギーにあふれた名曲ですが、ゲルギエフはこの日は指揮棒を持たず、右手の震えるような動きを駆使して多くのメッセージを伝え、楽員は距離をもとめず、熱く豊かな響きで熱演を作り上げます。思わずブラボーの声が飛んでしまったのも仕方ないと思わせる充実のパフォーマンスで、舞台のマエストロと楽員は充実感あふれる表情を見せます。</p> <p>【演目】 ジョアキーノ・ロッシーニ：歌劇『チェネレントラ』序曲、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：ホルン協奏曲第4番変ホ長調K.495、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第7番イ長調Op.92 【指揮】 フレリー・ゲルギエフ【演奏】 ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団 マティアス・ピニエラ（ホルン） 【収録】 2020年9月19日 ガスタイク フィルハーモニー（ミュンヘン）【映像監督】 ベネディクト・メロウ</p>
ゲルギエフ&ミュンヘン・フィル「ヴィニツカヤを迎えて」	20、 20、 22、 22、 24、 24、 28、28	2020年の新様式による、ゲルギエフ&ミュンヘン・フィルの演奏会。得意のソヴィエト作品で切れ味抜群の熱演を、そして『未完成』で重厚な名演を実現。	<p>2020年の新型コロナウイルスの影響によるさまざまな制限のもとで行われた、ドイツの名門楽団ミュンヘン・フィルの7月公演。「新様式」と言うべきスタイルで、弦楽器も1人ずつ譜面台を使い、各人が距離を取り、管楽器はより大きく離れて配置。第1ヴァイオリン8人という小規模の編成ですが、この配置で最高の演奏を届けるという強い意志のもと、できる限り緻密なアンサンブルと、それでも音楽のスケールは小さくないという、楽団の伝統を感じさせる演奏を実現しました。</p> <p>指揮は、2015年から首席指揮者を務めるフレリー・ゲルギエフ。この日は普通の指揮棒をもち、得意のソヴィエトの2大作曲家の楽しい傑作を聴かせます。最初のプロコフィエフの古典交響曲は、守りに入ることなくハイテンション。特に第1楽章の大きなスケール、第4楽章の猛烈なスピード感は鮮烈で、小編成ならではのスリリングな演奏は圧巻です。続いて、ロシアの名ピアニスト、アンナ・ヴィニツカヤを迎えて、ショスタコヴィチのピアノ協奏曲第1番。ピアノの超絶技巧と濃密な表現のすばらしさはもちろん、トランペット・ソロと弦楽合奏のオケとの絶妙な絡みで、シリアスからアイロニー、抒情的な楽章から喜劇映画のようなフィナーレまで、作曲者の機知に富んだ楽曲の好演が繰り広げられます。しかし、公演最後の曲は意外にもシューベルトの『未完成』で、それまでの現代的なムードが一変。この楽団らしく響きは堂々としながらも、あくまで優美な『未完成』の名演で、人数制限された会場の聴衆もさまざまな思いを巡らせたことでしょう。ゲルギエフの古典的なレパートリーを体験する機会は、日本では残念ながら多くはありませんが、丁寧で真摯な指揮ぶりや表情、そして正統派な名演の実現に、この名指揮者の本領が見出されます。</p> <p>【演目】 セルゲイ・プロコフィエフ：交響曲第1番ニ長調Op.25『古典』、ドミートリイ・ショスタコヴィチ：ピアノ協奏曲第1番（ピアノ）とトランペット、弦楽合奏のための協奏曲）ハ短調Op.35、フランツ・ベター・シューベルト：交響曲第7番短調D.759『未完成』 【指揮】 フレリー・ゲルギエフ【演奏】 ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団 アンナ・ヴィニツカヤ（ピアノ） グイド・ゼーガース（トランペット） 【収録】 2020年7月12日 ガスタイク フィルハーモニー（ミュンヘン）【映像監督】 ベネディクト・メロウ</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
クーベリック&ウィーン・フィル『ロマンティック』	23、 23、 25、 25、 27、27	クーベリックがウィーン・フィルを振る指揮姿のみならず、ゲルハルト・ヘッツェル、ウエルナー・ヒンク、21歳のライナー・キュッヒルの姿にも注目したい。	オーストリアの作曲家ブルックナーの交響曲は、ワーグナーの重厚さと長大さを持ち合わせ、自身オルガニストを務めた聖フローリアン教会のオルガンと合唱の響き、そしてオーストリアの豊かな自然が反映された独特なサウンドが、多くの音楽ファンを魅了しています。交響曲第4番『ロマンティック』は第1楽章の主題をはじめ、美しいメロディと生き活きたリズムに満ち、ブルックナーとしては演奏時間も長すぎず、日本でも人気が高い楽曲です。 この番組は、1971年1月12日～14日ウィーンの本拠地ウィーン・フィルで収録されたクーベリック&ウィーン・フィルの『ロマンティック』。ウィーン・フィルを指揮するクーベリックの貴重な姿のみならず、コンサートマスターに当時30歳のゲルハルト・ヘッツェル、その後ろに21歳のライナー・キュッヒル、ヘッツェルの隣がウエルナー・ヒンクといったウィーン・フィルのメンバーを見るだけでも、楽しめること請け合いです。コントラバスが最奥にいるウィーン・フィル独特の配置も注目。  [演目]アントン・ブルックナー：交響曲第4番変ホ長調『ロマンティック』WAB.104[指揮]ラファエル・クーベリック[演奏]ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団[収録]1971年1月12日～14日ムジークフェラインザール（ウィーン）[映像監督]アルネ・アルンボム■約1時間9分
ギルバートの「オデオンスプラッツ・コンサート2019」フレミングを迎えて	13、 13、 16、 16、 18、 18、 21、 21、 24、24	アメリカの国民的歌手&ニューヨーク出身の名指揮者を迎えた、極上の野外公演。凝りに凝った“アメリカン・プログラム”が、ミュンヘンの夏の夜空に響きわたる。	毎夏、ミュンヘン旧市街のオデオン広場で開かれる「オデオンスプラッツ・コンサート」。ミュンヘンが世界に誇る名門、バイエルン放送交響楽団とミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏をそれぞれ野外で堪能できるこの催しは、今や夏の風物詩として定着しています。 番組は、去る2019年夏のオデオンスプラッツ・コンサートの映像。ニューヨーク生まれの日系アメリカ指揮者アラン・ギルバートと、アメリカの国民的スター歌手ルネ・フレミングを迎え、バイエルン放送交響楽団が極上の音楽を届けます。 選曲は、ギルバート&フレミングのコンビならではの。生前にアメリカを訪れ、今日も同国で人気の高いチャイコフスキー、アメリカ音楽史上に燦然と輝くバーンスタイン、大戦中にウィーンからハリウッドへ亡命して現代アメリカの映画音楽の礎を築いたコルンゴルトらの作品に、プロドウェイ・ミュージカルのヒットナンバーが加わる、工夫を凝らしたプログラムです。 前半は、フレミングを中心とした多彩な歌曲公演。登場早々、自身の得意曲である『エフゲニー・オネーギン』のタチアーナのモノローグ（手紙の場面）をロマンティックに歌い上げます。ちなみにフレミングは、2009年のオバマ大統領就任祝賀コンサートでも「人生ひとりではない（You'll Never Walk Alone）」（ミュージカル『回転木馬』）を歌い、世界の注目を浴びました。白眉は、アンコールで披露されるガーシュインの「サマータイム」（『ボーギー&ベス』）。学生時代にジャズ歌手としても活動し、ジャズの録音経験もあるフレミングが、ムーディーな低音と持ち前の美しい高音を、ミュンヘンの夏の夜空に響かせます。 一転して後半は、バイエルン放送交響楽団によるチャイコフスキーの交響曲第5番。ギルバートらしいエネルギッシュな「チャイス」が、終始、同楽団の華麗で力強い金管セクションを際立たせます。一方、同楽団の特長の一つである伸びやかで品格のある弦のサウンドは、とりわけ第3楽章冒頭での木管群との絡みで発揮されています。 楽員たちが演奏中に浮かべる笑顔、会場の熱狂、舞台であるフェルト・ヘルンハレ（将軍堂）のライトアップ、時おり映し出されるテアティーナ教会や旧市街の夜景の美しさなど、野外コンサートだからこそ楽しめる要素が詰まった映像です。  [演奏]アラン・ギルバート（指揮）、ルネ・フレミング（ソプラノ）、バイエルン放送交響楽団 [演目]（前半）ビョートル・イリイチ・チャイコフスキー：歌劇『エフゲニー・オネーギン』から「ボロネーズ」、ビョートル・イリイチ・チャイコフスキー：歌劇『エフゲニー・オネーギン』から「私は破滅してもいい」（手紙の場面）、エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト：歌劇『カトリン』から「私は彼に、もう決して、決して会ってはならない」（手紙の場面）、ルナード・バーンスタイン：『ミュージカル「オン・ザ・タウン」から3つのダンス・エピソード』から第2曲「ロンリー・タウン（パ・ド・ドゥ）」、フリードリヒ・フォン・フロト：歌劇『マルタ』から「夏の名残のぼら（庭の干草）」 リチャード・ロジャース&オスカー・ハマースタイン2世：ミュージカル『回転木馬』から「人生ひとりではない」 ～アンコール～
カラヤン&ベルリン・フィル『魔弾の射手』序曲	5、5、 16、 16、 21、21	オペラにおけるドイツ・ロマン主義を確立した記念碑的作品として知られるウェーバーの歌劇『魔弾の射手』より、コンサートでも単独で取り上げられる有名な序曲。	オペラにおけるドイツ・ロマン主義を確立した記念碑的作品として知られるウェーバーの歌劇『魔弾の射手』より、コンサートでも単独で取り上げられる有名な序曲。カラヤン&ベルリン・フィルのコンビ全盛期の定番映像。  [演目]カール・マリア・フォン・ウェーバー：歌劇『魔弾の射手』J. 277～序曲[指揮&映像監督]ヘルベルト・フォン・カラヤン[演奏]ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団[収録]1975年1月フィルハーモニーザール（ベルリン）■約12分
カラヤン&ベルリン・フィル『第九』1977	2、2、 6、6、 8、8、 12、12	1977年大晦日にベルリンのフィルハーモニーザールで収録されたベルリン・フィルのジルヴェスター・コンサート。	ヘルベルト・フォン・カラヤンと蜜月時代のベルリン・フィル、ソリストはアナ・トモワ=シントウ、アグネス・バルツァ、ルネ・コロ、ホセ・ファン・ダム、合唱は大御所ハーゲン=クロール指揮のベルリン・ドイツ・オペラ合唱団など、まさに「チーム・カラヤン」の布陣。カラヤンらしい洗練された究極のアンサンブルがお楽しみいただける番組です。当時映像に力を入れていたカラヤンが、フィルムではなくビデオ収録した初作品としても知られています。  [演目]ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第9番二短調Op. 125『合唱』 [指揮]ヘルベルト・フォン・カラヤン[演奏]ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、アナ・トモワ=シントウ（ソプラノ）アグネス・バルツァ（アルト）ルネ・コロ（テノール）ホセ・ファン・ダム（バス）ベルリン・ドイツ・オペラ合唱団[合唱指揮]ヴァルター・ハーゲン=クロール [収録]1977年12月31日フィルハーモニー（ベルリン）[映像監督]ハンフリー・バートン■字幕／約1時間11分

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
カラヤン&ベルリン・フィル『ベートーヴェン：交響曲第1番』	5、5、 9、9、 15、 15、 27、27		<p>[演目] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第1番 長調 Op.21          [指揮] ヘルベルト・フォン・カラヤン [演奏] ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団          [収録] 1971年UFAフィルム・スタジオ（ベルリン） [映像監督] アルネ・アルンボム ■ 約25分</p>
ガーディナー & バイエルン放送響「宗教曲の夕べ」	23、 23、 26、 26、 28、28	「古楽出身の巨匠」×「宗教曲にも定評ある世界屈指のオーケストラ&合唱団」による、全身全霊からほとばしる熱氣と厚い信仰の空間！	<p>ドイツはもちろん世界でも最高のオーケストラの一つ、バイエルン放送交響楽団に古楽の旗手であり今や有数の巨匠指揮者の一人、ジョン・エリオット・ガーディナーが客演。さすがバロックの宗教曲のために自ら楽団や合唱団を創設したガーディナー、今回の客演でも造詣の深い宗教をテーマに見事なプログラムを組み立てました。ハイドンのラテン語によるモテットに、プロテスタントのルターのコーラルをもつメンデルスゾーンの交響曲、そしてブルックナーによるカトリックのミサ曲です。どの曲もガーディナーの統率のもと、宗教曲にも定評あるこの名楽団・合唱団の優れた音楽性が最高の技術によって湧き上がり、全身全霊からほとばしる熱量がそのまま厚い信仰の空間と化すかのよう。合唱団の音楽監督は、世界最高のスウェーデン放送合唱団とその任を兼務するダイクストラですから尚更。</p> <p>前半のハイドンとメンデルスゾーンで目を引くのは、チェロ以外の弦楽器が立奏していること。ハイドンでは合唱の中で古楽仕様のトロンボーンを使用し、疾風怒濤の部分がさらに力強く、この厚みと透明度の両立はさすがバイエルン。</p> <p>もう一つの注目は、古楽出身の指揮者だけあって、弦楽器のピブラートを適宜抑制させていることです。メンデルスゾーン「宗教改革」の序奏はノン・ピブラート。何度か出てくる”ドレスデン・アメン”が敬虔で清らかな響きとなるのに大きな効果を発揮します。また力強く澄んだルターのコーラル「神はわがやぐら」に始まるフィナーレで、それが最後に再び全奏で鳴らされる時の高揚感ときたら！</p> <p>ブルックナーのミサ曲は、3曲いずれもが40代前半の時の作品で、第1番は交響曲第1番より前に書かれています。これこそ彼にとって初めて公開演奏された記念すべき一作であり、ブルックナーはロマン派時代にあって、カトリック教会音楽に再び大きな貢献をしたのでした。巨匠選りすぐりの名歌手たちを加えた当演奏が聴き手にそれを想起させ、キリエの狂廠、グローリアの歓喜などを経て、最後に「ドナ・ノビス・パーチェム（われらに平安を与えたまえ）」の歌詞とともに消えていく余韻は、静かな感動を誘います。</p> <p>[指揮] ジョン・エリオット・ガーディナー [管弦楽] バイエルン放送交響楽団 [合唱] バイエルン放送合唱団 [合唱指揮] ベーター・ダイクストラ          [出演] ルーシー・クワウ（ソプラノ） ジェニファー・ジョンストン（メゾ・ソプラノ） トビー・スベンス（テノール） ギュンター・グロイスベック（バス）          [曲目] フランツ・ヨーゼフ・ハイドン：モテット「度の過ぎた空しき苦悩」Hob. X X I：1-13c, フェリックス・メンデルスゾーン：交響曲第5番 二短調 Op.107「宗教改革」、アントン・ブルックナー：ミサ曲第1番 二短調, 1.キリエ/2.グローリア/3.クレド/4.サンクトゥス/5.ベネディクトゥス/6.アニュス・デイ          [収録] 2014年5月29日 ガスタイク・フィルハーモニー（ミュンヘン） [映像監督] ティロ・クラウゼ ■ 約1時間27分</p>
ヴェルビエ音楽祭2017「ジャンヌ・ヤンセン&ミハイル・プレトニョフ」	5、5、 16、 16、 21、21	熱いパッションと明晰な頭脳をもつロシアの名匠に率いられ、未来を拓く若者たちのオーケストラが響かせる濃厚なロマンス	<p>スイスの風光明媚な高原リゾート地、ヴェルビエで1993年から毎夏行われているヴェルビエ音楽祭。札幌のPMF同様、世界の若く優秀な演奏家たちが集う教育音楽祭でもあり、彼らは名演奏家たちからオーケストラ・プレイヤーとしても指導を受け、コンサートを開きます。当番組で紹介する、2017年公演の指揮者はミハイル・プレトニョフ。ロシアを代表する大ピアニストであり、今や大指揮者の一人です。</p> <p>このヴェルビエ祝祭管弦楽団（VFO）はそうした若者の集まりゆえ、まずピカピカな上手さが際立ち、それがプレトニョフの指揮により濃厚な音になっていきます。1曲目のグラスノフの組曲『中世より』では、初めこそ管楽器が青竹のような硬さを感じさせるものの、ロマンティズムを混えた弦楽は実に清々しく響きます。2曲目は、真紅のドレスに身を包んだヤンセンがソロを弾くチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲。完全無比のヴァイオリンは、熱くエモーショナルな抒情と、滑らかなシルクのようなピアニシモで、聴き手の胸に迫ります。今やこの曲にかけて世界屈指と謳われるヤンセンに感動することはもちろん、アイコンタクトをしながらVFOを冷静に統御して共に音楽を作るプレトニョフの手腕の見事さも光ります。</p> <p>このヴァイオリン協奏曲と同時に書かれた、ドラマティックな交響曲第4番では、プレトニョフの中に溢れるロシアン・ロマンティズムと彼の明晰な頭脳が、濃厚なロマンスに彩られたサウンドとクリアなディテールを作り上げます。第1楽章の華麗な幻想と激情、第2楽章の憂愁なメロディの中に明滅する木管の音、「夏の夜の夢」の妖精バグのように跳ね回る弦のピチカートによる第3楽章、そして情熱的でスリリングなフィナーレ……。冒頭の金管群による”運命の動機”は多くのロシア人指揮者が振るときと同様、じっくり重く響き、それがフィナーレで再び鳴らされるとき、聴き手は曲全体にのしかかる運命の重みをいやが上にも実感します。そして、それを超えて、未来を拓かんとするVFOの若者たちの覇気が伝わってくるようです。</p> <p>[演目] アレクサンドル・グラスノフ：組曲『中世より』op.79から前奏曲、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.35          ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー：なつかしい土地の思い出 op.4からメロディ（リスト・アンコール）ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー：交響曲第4番 短調 op.36          [演奏] ミハイル・プレトニョフ（指揮）ヴェルビエ祝祭管弦楽団 ジャンヌ・ヤンセン（ヴァイオリン）          [収録] 2017年8月6日、ヴェルビエ音楽祭（スイス） [映像監督] クリステリアン・ブル ■ 約1時間46分</p>



番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
BBCプロムス2016「ゲルギエフ&ミュンヘン・フィル」	20、20、22、22、24、24、28、28	ロンドン夏の風物詩「BBCプロムス」は1895年、指揮者ヘンリー・ウッドと興行師ロバート・ニューマンがクラシック音楽を庶民にも親しんでもらおうという意図で創設した音楽祭です。	<p>通常のクラシック・コンサートとは異なり、平土間と天井桟敷が見え（プロミンク）であるのが特徴。会場のロイヤル・アルバート・ホールでは7月中旬から9月中旬にかけて毎晩オーケストラ・コンサートが開催されています。この番組は、ロシアの指揮者ヴァレリー・ゲルギエフと彼が首席指揮者を務めるミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団による2016年7月18日「プロムス4」の様式。2015年までロンドン交響楽団首席指揮者としてプロムスに出演したゲルギエフは、2016年はミュンヘン・フィルと登場。ラヴェルの『ボレロ』、ラフマニノフの『ピアノ協奏曲第3番』（独奏は、2016年札幌の国際教育音楽祭PMFでも来日した1990年ウズベキスタン生まれの若きピアニスト、ベフゾド・アブドゥライモフ）、R・シュトラウスの楽劇『ばらの騎士』演奏会用組曲、そしてこの番組最大の見どころであるロシアの女性作曲家ガリナ・ウストヴォーリスカヤ（1919-2006）の交響曲第3番『救世主イエスよ、われらを救いたまえ』。ウストヴォーリスカヤはショスタコヴィチに師事し、一時恋愛関係にもあったといわれる女性です。ソ連のスターリン時代はその神秘的で特異な作風で日の目を見ることはできませんでしたが、ベレストロイカとその後のソ連崩壊によって西欧でも知られるようになり、1990年代には爆発的なブームが起きました。彼女の交響曲は、1983年に作曲されたこの第3番の副題でもわかるように、宗教的題材と独唱者または語り手が付くという特徴を持っています。とてつもないエネルギーと圧倒的な迫力を持つ楽曲は、ゲルギエフが圧巻の指揮によって、この公演の大きなハイライトとなりました。語り手は映画『ロマノフ王朝の最期』のロシアの俳優アレクセイ・ペトレンコ。とにかく一度体験するべき楽曲です。</p> <p>[演目]モリス・ラヴェル：ボレロ、セルゲイ・ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番二短調Op.30、フランツ・リスト：ラ・カンパネラ、ガリナ・ウストヴォーリスカヤ：交響曲第3番『救世主イエスよ、われらを救いたまえ』、リヒャルト・シュトラウス：楽劇『ばらの騎士』演奏会用組曲、エクトール・ベルリオーズ：ハンガリー行進曲 [指揮]ヴァレリー・ゲルギエフ[演奏]ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ベフゾド・アブドゥライモフ（ピアノ）アレクセイ・ペトレンコ（語り手） [収録]2016年7月18日ロイヤル・アルバート・ホール（ロンドン）「プロムス4」[映像監督]サイモン・プロートン■字幕／約1時間59分</p>
BBCプロムス2015「アンドラーシュ・シフのゴルトベルク変奏曲」	23、23、25、25、27、27	ピアノの巨匠アンドラーシュ・シフが挑む、J.S.バッハの最高傑作「ゴルトベルク変奏曲」との一本勝負。プロムスの感動のライブをじっくりと。	<p>現代最高のピアノの名匠の一人、アンドラーシュ・シフが、2015年のプロムスに登場。ロイヤル・アルバート・ホールにて、ヨハン・セバスティアン・バッハの「ゴルトベルク変奏曲」を披露しました。</p> <p>プロムスの賑やかなラスト・ナイトでもおなじみのロイヤル・アルバート・ホールは、収容人数8000とも言われる破格の巨大ホールです。その広大な空間で、たった一人、ピアノ1台でバッハを奏で、会場の注目を一身に受けるシフ。舞台奥に置かれているプロムス創始者ヘンリー・ウッドの胸像が舞台を見つめるほかは、聴衆の様子もほとんど映らず、シフの孤高の境地が余すところなく堪能できます。巨大空間の聴衆が息をのんで静寂を作る緊張感も印象的で、全曲中数回だけシフが少し息を取ったときの聴衆のわずかな呼吸も、会場のリアルな空気感を伝えてくれます。</p> <p>シフはバッハに取り組むにあたり、スタインウェイのピアノを特別に調整し、ペダルを使わずに弾いています。普通の奏者であれば音がポツポツ切れそうところ、シフは長い研究による深い読み込みと、卓越したタッチの使い分けにより、信じられないほど豊かなフレーズ感と千変万化の音色を実現しています。繰り返しはすべて行い、2回目には装飾を加えるなど、70分を超える演奏中、ルーティンになる瞬間は皆無。シフは落ち着いた面持ちのまま、バッハの技法と芸術の粋が詰まった音楽を味わい、楽しんでます。そして全曲の到達点たる第30変奏「クオドリバッド」でにじみ出る高揚感、そして最後の「アリア」の抑えた感動は胸に迫ります。</p> <p>巨匠シフが挑む、バッハの最高傑作との一本勝負。じっくりお楽しみください。</p> <p>[演目]ヨハン・セバスティアン・バッハ：ゴルトベルク変奏曲BWV.988[ピアノ]アンドラーシュ・シフ（ピアノ） [収録]2015年8月22日ロイヤル・アルバート・ホール（ロンドン）「PROM 50」[映像監督]マシュー・ウッドワード■約1時間20分</p>
<b>ドキュメンタリー &amp; エンターテイメント</b>			
熱弁！ ムーティが語るトスカニーニ	2、2、6、6、8、8、12、12	トスカニーニ生誕150年記念。ムーティとトスカニーニ研究者ハーヴェイ・サックスがトスカニーニについて語る討論会。トスカニーニのアーカイブ映像は必見。	<p>20世紀を代表するイタリアの指揮者アルトゥーロ・トスカニーニ（1867～1957）の生誕150年を記念して、巨匠リカルド・ムーティとトスカニーニ研究の第一人者ハーヴェイ・サックスによる徹底討論会。</p> <p>1986年から2005年までミラノ・スカラ座音楽監督、現在はシカゴ交響楽団音楽監督を務めるムーティは、イタリア・オペラの伝統が失われつつあることに危機感を抱き、次世代の音楽家や一般の観客に、その正統的な演奏を伝えなければならないという使命感で、公開でのアカデミーやレクチャーを精力的に行っています。一方、サックスは、東京・春・音楽祭のリカルド・ムーティ「イタリア・オペラ・アカデミー in 東京2019」で来日し、トスカニーニの講義を行ったことも記憶に新しい。</p> <p>トスカニーニが継承し発展させ、最後の輝きをもたらしたイタリア・オペラ黄金時代の伝統、ワーグナーやヴェルディが現役で活躍していた時代の、今日では失われてしまった伝統とは何なのか。トスカニーニの一体どこが革命的であったのか。この番組では、近年発見されたトスカニーニとNBC交響楽団のテレビ演奏会映像（ヴェルディの『アイダ』、ベートーヴェンの『第九』、ドビュッシーの『雲』、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』第1幕前奏曲）を見ながら、トスカニーニの弟子アントニーノ・ヴェネツィーニから多くを学んだムーティと、トスカニーニの世界的権威サックスが語る鋭く深い洞察が圧巻です。</p> <p>また、今回はピアノこそ弾きませんが、入門的なものから専門的内容まで、ムーティのユーモアと舌舌を交えた喋りの上手さも見どころ。時に歌いながら、時にコメディアンのように、その愛嬌たっぷりの笑顔と話し方に、バルマ王立歌劇場の満員の観客も拍手と爆笑の連続です。</p> <p>トスカニーニの分析を通じて、20世紀における指揮者の役割の変遷、劇場と指揮者の関係の変質が明らかになっていく番組です。</p> <p>[出演]リカルド・ムーティ（指揮者）ハーヴェイ・サックス（音楽史家／『トスカニーニ自伝』著者） [アーカイブ映像]ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇『アイダ』～「聖なるナイルの岸に急げ」、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第9番二短調Op.125『合唱』～第4楽章より、クロード・ドビュッシー：夜想曲～第1曲『雲』、リヒャルト・ワーグナー：楽劇『トリスタンとイゾルデ』第1幕前奏曲 [収録]2017年2月4日バルマ王立歌劇場 [監督]ガブリエーレ・カッザラ■字幕／約1時間40分</p>

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
熱弁！ムーティが語る『椿姫』	5、5、 9、9、 15、 15、 27、27	ムーティがピアノを弾きながらヴェルディの歌劇『椿姫』を徹底解説。強面の印象が強い巨匠のユーモアを交えたわかりやすいトークと愛嬌たっぷりの笑顔は必見。	1986年から2005年までミラノ・スカラ座を音楽監督として牽引し、現在はシカゴ交響楽団音楽監督を務める巨匠リッカルド・ムーティは、イタリア・オペラの作曲家ジュゼッペ・ヴェルディを“生涯の作曲家”と位置づけ、近年同じイタリア人としてヴェルディ・オペラの真実を伝えるレクチャーを世界各地で行っています。2019年は日本で初めて「イタリア・オペラ・アカデミー」が開催され、2021年まで3年連続で東京・春・音楽祭で行われます。 この番組は、ムーティがピアノを弾きながらヴェルディ中期の傑作『椿姫』を徹底解説。ユーモアを交え、時に歌い、時に踊りながら、ヴェルディ音楽の特徴や場面ごとのドラマの組み立て方など、入門的なものから専門的な内容まで、幅広い角度で語ります。 巨匠のお客様に語りかけるような喋りの上手さ、声の良さ（歌も上手い！）、愛嬌たっぷりの笑顔など、強面の印象が強いムーティの意外な面に誰もが魅了されるはず。そして、彼のピアノの上手さは有名ですが、前奏曲の音色の美しさや場面ごとのドラマティックな音楽作り、明確な音の粒立ちなど、巨匠のピアノは最大の見どころです。 イタリア・オペラの伝統が失われつつあることに危機感を抱くムーティは、次世代の音楽家たち、そして一般のお客さんにも、その正統的な演奏を伝えなければならないという使命感を持って、公開でのアカデミーやレクチャーを始めています。巨匠自らが長年研究及び演奏してきたからこそ語れるヴェルディ・オペラの真実と音楽の醍醐味は、演出や歌手にとらわれがちなオペラ鑑賞とは異なる、まさにオペラの新しい楽しみ方が発見できる番組です。  [出演]リッカルド・ムーティ（お話し&ピアノ） クラウディア・パヴォーネ（ソプラノ） イヴァン・デファビアニ（テノール） [収録]2016年7月23日ダンテ・アリギエーリ劇場（ラヴェンナ） [監督]ガブリエーレ・カンツル ■字幕 / 約2時間2分
ホワイト・ハンド・コーラス～障害を越えたハーモニー	2、11、 11、 14、 14、 17、17	子供たちを見ているだけでこちらまで笑顔になる、本当の音楽の喜びに出会える番組です。	2013年ザルツブルク音楽祭は、音楽を通じて貧困層の子供たちを救うベネズエラの画期的な音楽教育システム「エル・システマ」が特集されました（今や世界的指揮者となった若き天才オグスターボ・ドゥダメルもエル・システマの教育を受けた一人）。その中でも「ホワイト・ハンド・コーラス」は障害を持つ子供たちを社会と結びつけることを目的に1995年創設され、肉体的・精神的障害を持つ子供たちと白い手袋をした手の動きで歌う聴覚障害・聾唖の子供たちが同じステージで歌うユニークな合唱団として注目を浴びています。彼らの初の海外ツアーが何とザルツブルク音楽祭！この番組は、喜びにあふれる彼らのコンサートとその舞台裏を収めています。プログラムはベネズエラ民謡からボサノヴァ、ピアノソナ、モーツァルトまで。歌を歌うことができなくとも白い手袋をした両手で合唱ができる幸せ！そして障害があっても大きな声で歌える幸せ！彼らの素晴らしいハーモニー、ラテンのリズムのノリの良さは必見。  [出演]ホワイト・ハンド・コーラス、ナイバス・ガルシア（指揮） ルイス・チンチージャ（指揮） ブラシド・ドミンゴ[演目]フランシスコ・セスベデス（ホセ・D・コロナド編曲）：ラ・ビダ・ロカ、ベネズエラ民謡：ガバン、アントニオ・カルロス・ジョビン（グスターボ・フローレス編曲）：イバネマの娘、ホセ・フェルナンデス・ディアス（グスターボ・フローレス編曲）：グァンタナメラ、アストル・ピアソラ（リリアーナ・カリヤノ編曲）：天使の死、オスカル・ガリアン：サルセオ、リシャール・エギュエス（コンラド・マニエル編曲）：エル・ボデゴロ、エドガール・マヒアス（ルイス・チンチージャ編曲）：タムナングェアンド、アデルス・フレイテス（ルイス・チンチージャ編曲）：2人のガビラン、ペドロ・エリアス・グティエレス：アルマ・ジャネーラ（平原の魂）、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：アヴェ・ヴェルム・コルプスK.618 [収録]2013年8月8日&9日モーツァルトウム（ザルツブルク）「ザルツブルク音楽祭2013」[映像監督]クリスティアン・クルト・ヴァイス ■字幕 / 約51分
ブラハのベーム～『ドン・ジョヴァンニ』レコーディング	1、4、 4、7、 7、10、 10	今なお「史上最大のミスキャスト」と波紋を呼んでいる、ベームが指揮したモーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』レコーディングのリアーサル風景。	ベームの数あるオペラの中で今なお「史上最大のミスキャスト」と波紋を呼んでいる、1966年録音のモーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』。この番組は、ブラハで行われたそのレコーディングのリアーサル風景で、1994年ベーム生誕100年の際に地上波でも放映され、音楽ファンの間で大きな話題を呼びました。 ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ（ドン・ジョヴァンニ）、ビルギット・ニルソン（ドンナ・アンナ）、マーティナ・アロヨ（ドンナ・エルヴィーラ）、マルティ・タルヴェラ（騎士長）、ペーター・シュライアー（ドン・オッターヴィオ）、レリ・グリスト（ツェルリーナ）など、いずれも20世紀を代表する歌手がキャスト。ベームがどのようにレコーディングしていたのかを知る上でも、大変貴重な記録です。  [出演]カール・ベーム、ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ、ビルギット・ニルソン、レリ・グリスト、マルティナ・アロヨ、ペーター・シュライアー、マルティ・タルヴェラ、ブラハ国立歌劇場管弦楽団[監督]ヴォルフガング・エステルレ[制作]1967年 ■字幕 / 約58分
ドキュメンタリー『神々の黄昏～バイロイト音楽祭の世紀』	23、 23、 23、 25、 25、 27、27	ティーレマン指揮『神々の黄昏』、2008年新制作のガッティ指揮『バルジファル』のリアーサルを中心に、音楽祭の裏舞台と現在過去未来を三部構成で紐解く。	1951年から長きにわたりバイロイト音楽祭のトップに君臨し続けたヴォルフガング・ワーグナー（リヒャルト・ワーグナーの孫）が2008年を最後に引退。2009年より、ヴォルフガングの2人の娘、エーファ・ワーグナー＝バスキエ（先妻の娘）とカテリーナ・ワーグナー（2007年死去した2度目の妻グートルーンの娘）による新たな時代が始まった…。この番組は、2000年以來音楽祭で毎年指揮するクリスティアン・ティーレマンの『神々の黄昏』、2008年の新制作『バルジファル』（シュテファン・ヘアハイム演出／ダニエル・ガッティ指揮）のリアーサルを中心に、ワーグナーが「Werkstadt（工房）」と呼んだバイロイト音楽祭の裏舞台と現在過去未来を、「音楽」「舞台」「家族」の三部構成で紐解いたドキュメンタリー。ワーグナー・ファミリー、特に演出家としても活躍するカテリーナのコメントは、これまで次期総裁の座を巡るお家騒動が世間を賑わしていただけに興味深い。音楽祭常連の日本人メゾ・ソプラノ、藤村実穂子が『神々の黄昏』（ヴァルトラウテ役）『バルジファル』（クンドリ役）で大活躍。  [出演]クリスティアン・ティーレマン、シュテファン・ヘアハイム、ダニエル・ガッティ、藤村実穂子、ヴォルフガング・ワーグナー、カテリーナ・ワーグナー、ニケ・ワーグナー、ダフネ・ワーグナー、ピエール・ブーレーズ、ダニエル・バレンボイム、ジークフリート・イェルザレム[監督]ミハエル・クロフト&ペーター・ジーンモルゲン[制作]2008年 ■字幕 / 約1時間31分

番組名	放送日	概要	曲目、出演者等
ドキュメンタリー『パイロイト音楽祭の100年』～ワーグナー芸術の現在から未来～	3、3、 11、 11、 15、 15、 19、19	ドイツの政治文化史に深く関わるパイロイト音楽祭の100年を、さまざまなアーカイヴ映像を交えて紹介。祝祭劇場の内部構造やそこで働く職人たちの姿も興味深い。	1876年に始まったパイロイト音楽祭は、リヒャルト・ワーグナーの死後、妻コジマから息子ジークフリート、その妻ヴィニフレット、その息子ヴィーラント、そしてその弟ヴォルフガングへと引き継がれてきました。彼ら一族によってワーグナー芸術がどのように上演されてきたのか。ドイツの政治文化史に深く関わるパイロイト音楽祭の100年を、さまざまなアーカイヴ映像を交えて紹介。祝祭劇場の内部構造やそこで働く職人たちの姿も興味深い。  [出演]ヴォルフガング・ワーグナー（パイロイト音楽祭総監督）ヴィーラント・ワーグナー（演出家）エルンスト・ブロッホ（哲学者）ヴィリー・ハース（作家）ハインツ・ティティエン（指揮者）カール・ベーム（指揮者）アンドレ・クリュイタンス（指揮者）カルロス・クライバー（指揮者）ホルスト・シュタイン（指揮者）ピエール・ブーレーズ（指揮者）他[監督]ルドルフ・デュモン・デュ・ヴォワテル[制作]1976年 ■字幕／約1時間
ドキュメンタリー「R・シュトラウス～虹の終着にて」	2、2、 11、 11、 14、 14、 17、17	クラシック音楽が最も濃厚で美しかった時代。19世紀にかかったロマン派の虹の上を歩んだ最後の大作曲家リヒャルト・シュトラウスの軌跡。	『ツアラウストラはかく語りき』『ぼらの騎士』『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら』『サロメ』『エレクトラ』……。作曲家リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）の音楽の魅力や作品の背景を、さまざまな音楽学者や音楽家たちが、それぞれの視点から解き明かすとともに、手紙の朗読や作曲家の孫のクリスティアン・シュトラウス氏の証言も交えて、R・シュトラウスの人間像も細かくドキュメンタリー。カルロス・クライバーやヘルベルト・フォン・カラヤンのドキュメンタリーでエコー賞やグラモフォン賞を受賞するなど高い評価を受けてきたエリック・シュルツ監督が、ここでR・シュトラウスの音楽に見出したのは、「虹の終着」という位置づけでした。 1864年生まれのR・シュトラウスは、グスタフ・マーラー（1860～1911）やクロード・ドビュッシー（1862～1918）ら、後期ロマン派から近代の作曲家たちと同時代と言えますが、長命だったシュトラウスの後半生には、十二音技法やストラヴィンスキー、さらにはメシアンやブーレーズの現代音楽も「同時代」のものでした。多くの作曲家たちがその影響を強烈に受けて作風を変えていったなかで、最晩年まで、変わらずにR・シュトラウスの音楽の核になっていたのは、19世紀のロマン派音楽のリリシズムです。クラシック音楽が最も濃厚で美しかった時代。彼が歩んだのは、ロマン派の残照の中に架かった美しい虹の橋の最後端でした。そして、その虹が20世紀音楽の怪しい光彩の中に消えていったあとも、R・シュトラウスの音楽は眩い光を放ち続けているのです。 番組では、R・シュトラウスの指揮映像もふんだんに盛り込まれ、彼自身が指揮法について「簡潔な身振りで、手首の動きだけによるほど演奏が正確になる」「左手に関しては何もすることがない。ポケットにでも突っ込んでおくのが最適」などと述べているように、あの官能的な音楽をまるで他人ごとのように冷静に指揮する姿は印象的です（しかしオットー・クレンペラーによれば、オーケストラはそれでもまるで何かに憑かれたように演奏したといいます）。注目は、1936年のベルリン・オリンピック開会式でベルリン・フィルと1,000人の合唱団を相手に自作の『オリンピック讃歌』を指揮する姿。レニ・リーフェンシュタール監督の記録映画『民族の祭典』にも映っていなかった貴重映像です。短いシーンではありますが、お見逃しなく！  [出演]ブリギッテ・ファスベンダー（歌手）ディアナ・アル・ハッサーニ（ピアノ）アンドレ・フォートマン（ドイツ放送アーカイブ）レイモンド・ホールデン（作家・指揮者）クラウス・ケーニヒ（バイエルン州立歌劇場管弦楽団）シュテファン・ミキシュ（ピアニスト）エンマ・ムーア（歌手）クリスティアン・シュトラウス（R・シュトラウスの孫）ヴァルター・ヴァーベック（音楽